

【呪術廻戦】 さようなら  
を教えて

クルスロット

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

恋を諦め、呪術を諦め、何もかもを諦めたはずなのに、また呪術を手にはせざる得なかった女が死ぬまでのお話。

※作者が単行本勢なので基本的に設定や展開等はそちらに準拠しています。

#	#	#	#	#	#	#	#	#
9	8	7	6	5	4	3	2	1
111	97	81	69	53	40	27	13	1

# 目次



## # 1

「おいこら！ 金を出せ!!」

「アイエエエ……!! ササナイデ！ コロサナイデ！ オカネ、ダシマスカラ！ オネガイシマス！ ヤメテ！」

「おう、早くしろ!! おら！ おら！」

「ア、アイエエエエ……」

「こ、コンビニ強盗だ……!!」

初めて対面したコンビニ強盗に、都立呪術高専一年生、虎杖悠仁は、只々、驚愕していた。

「東京ってすげえな……」

東京でもコンビニ強盗に遭遇するのは稀だ。年々、コンビニ強盗そのものは減少傾向にある。実入りが少ない上にセキュリティレベルが高まる一方だからだ。その辺の一般市民の財布の方が潤っている事があるほどに、コンビニのレジには金が無い。

A T M 設置店舗は非常に多いが、そこまでするなら銀行の A T M を狙えばいい。が、これもまたセキュリティが——いや、どうでもいい話だった。

「いやいや、関心している場合じゃないぞ、俺」

そう、感心している場合じゃない。虎杖は通報しなきゃ……と思って、スマホを探して、制服のポケットに指を——。

「しまった……」

忘れていた。今頃、寮の机の上だ。指は何にも触れない。財布はあるがスマホはない。とんだ失態である。

「どうする……?」

正直なところ、監視カメラが全く目に入っていない強盗犯がこの後、無事に逃げ出した上で金を使える可能性は限りなく低い。なので、虎杖は何もせずに強盗犯がいなくなるのを待つのが得策だ。

だが、何故だか虎杖は使命感に駆られていた。ちよつとした非日常感がそうさせるのか。

呪霊や呪詛師との戦いを日常としているのに何を今更というが、そういう非日常とはジャンルが別だ。スイーツは別腹みたいなそういう感覚。

虎杖がそうこうしている内に。

「遅え!!」と、金の入ったバックを店員からもぎとると強盗犯は、自動ドアに一直線。逃げ足が早い。虎杖も反応して走り出そうとした——その時。

自動ドアが開く。強盗犯はまだ自動ドアのセンサーに引っかかる距離じゃない。寸前だった。目の前で、先んじて自動ドアが開く。間抜けた来店の効果音が店に響いて、現れたのは、

「う、うお……!」

女。しかし、強盗犯が狼狽えるほどにでかい。今どきのコンビニは自動ドア横に、強盗等の身長を測るための簡易的な表が貼つてある。それによれば、百八十は軽く越していた。二メートルに迫るほどだ。自動ドアの上側に頭をぶつけそうになりながら、女は入ってくる。

根本まで綺麗に染め上げた赤髪が麗しく、身長に見合つて大きな胸と逆に引き締まつたウエスト、続くヒップも美意識が詰まった曲線。東堂が居たなら、求婚してもおかしくない。

それらを明るいグレーのタートルネックセーターと細身の黒デニムで覆い、カーキのモッズコートに彼女は羽織っていた。

「あつ……!」

丁度、虎杖が女を認識したのもその時だった。少し、付け加えると、

「あべしッー！」

強盗犯の側頭部に、月刊少年ガンガンが突き刺さったのも同タイミングだった。

虎杖らしい——砲丸投げをオーバーブローでやってのけ、サッカーゴールを歪ませる

——一撃だったと言える。

いい角度で突き刺さり、完璧に強盗犯の意識を吹き飛ばしたらしい。彼は、頭を揺らしながら倒れ込む。その手から滑り落ちた包丁は、セラミックタイルをからんと鳴らした。

「……………」

やらかしたとばかりに冷や汗を浮かべた虎杖は黙り込み、

「……………」

件の女性は、何事か測りかね、首を傾げたまま沈黙し、

「ナ、ナイスボール……………」

なんて発音良く店員が呟いたものの、フルメタル般若心経（ボーカル・楽巖寺嘉伸）が響く店内には、ほとんど残らなかった。

十  
十  
十



「これ、お礼に」

「あざーっす！ お、おおっ?!」

差し出されたのは、ホットコーヒーの缶とビニール袋一杯の菓子。それもどちらかと言えば駄菓子の分類。十円のガムやら安っぽいチョコ菓子、色んな味付けの菓子。懐かしのカルパスから蒲焼きめいたあれそれ。ある種混沌的な袋の中身。

「いいんすか？ これ、買いに来たんすよね——お、ブラツクケラウノスじゃん。懐かしい〜。これ好きなんだよなー」

一番上に乗っていた菓子を摘み上げる。黒地に金の装飾。デカデカと商品名。中にはチョコ菓子が入っているのを虎杖は知っている。子供の頃、よく食べたのだ。ここ最近、ご無沙汰だったのも合わせて思い出す。

「いいの。あのままだったら刺されてたかもしれないしね。ほんとありがとう。助かったよ」

「……そうっすね」菓子を弄る手をぴたりと止めて、「良かった。本当に良かった」

深々と下げてくる彼女に、虎杖は深い感慨を覚える。本当に良かった。心の底から虎杖は思った。指先が掠る程度でも、何かでどうにかこうにか手繰り寄せられる距離なら救うと決めていたから。

落ち葉が目の前を横切った。すつと虎杖は視線を持ち上げる。ふわりと舞う落ち葉

は一つでは収まらない。ベンチの上で、かさりかざりとビニール袋は鳴る。

時候は、秋真つ盛り。赤と黄は公園の木々を彩って、何気なく視線を横切る落ち葉にふつと手を伸ばせば、力を込めずともたやすく壊れる。残骸もまた、風が撫でるように攫つていった。

ふと思う——仙台は今、どうだろうか。先輩たちは元気かな。爺ちゃん、墓参りしてないけど寂しがってないだろうか。そんな風にやや取り留めなく思考は浮かび、黄昏れてしまう。

「そういえば、自己紹介していなかったね」

気を取られていた虎杖は、声に我に返った。気づけば、彼女はすつと手を差し出していた。意図を図るまでもない。

「空木田<sup>カラキダ</sup> 朱音<sup>アカネ</sup>。よろしくね」

一瞬の躊躇いを覚えながらも、虎杖は握り。

「虎杖悠仁です。えっと、」どう呼ぶか迷い「朱音でいいよ」

「うっす（女の人と握手とか中々無いよなあ……）」

心中のどきまぎを、虎杖は顔に出さないよう気をつけていた——何故か？

A. 年上の魅力にときめいていた。

見た目が完璧にストライク。詳しく言うと思春期があれなので、割愛。ピックアップ

すると、包容力、女子力。大きな胸、高い身長。今の所、身近にない要素。

虎杖の深刻な俺の周りの女子怖すぎ問題——東京都及び京都市内の数カ所、誰かさん達がくしやみをした——。

異性との皮膚接触は、虎杖の脳裏を駆け巡るときめきエナジーへと変換された。エナジーはエネルギー。思春期をエネルギーシユに。まるでCMのキャッチコピー。二チアサの合間に流れてそうなフレーズ。

しかし、虎杖には、気になることが一つ合った。

——冷たい。氷を握りしめたような感覚。秋口だから、涼しくなってもいる。風も心地良い。けれど、これはまるで。

「えつと……」

「うお、」トリップしてた虎杖は急いで手を離し「すみません」と苦笑い。

「いいよ。もうちよつと握つとく？」

なんて悪戯に言われると虎杖は、くらつときた。可愛いか。でつかい可愛いが座ってる。爺ちゃん、人を助けろってこういう意味だったんだな——なんて虎杖は思うけど、間違いなく違う。

「え、遠慮しとく……」

「ん、了解」

朱音の手の中から、ぱしゅつと微かに開封音が聞こえた。口元で傾けられたのは、先に虎杖に渡したものと同じ銘柄のコーヒー缶。

「ふー、美味しい」

そこで虎杖も思い出す。コーヒー缶の熱いくらいの温かさ。冷めてしまう前に、虎杖もプルタブを起こし引く。微かな開放の余韻が鼻孔を擦った。香ばしい薫りは鼻奥へと入り込み、熱い液体は舌を焼きそうに思えた。

「……熱い」秋の冷気に舌を晒し「苦い……」渋く呟いた。

虎杖は、手元の菓<sup>ブラックケラウノス</sup>子の包装を破り、黒いチョコ菓子を無造作に齧った。美味しい。正直に思う。

「美味しいよね、ケラウノス。コーヒーに合う」

隣の朱音もまた、同じようにブラックケラウノスに舌鼓を打つ。さくつと端切れの良い咀嚼が朱音の口元で幾度か音をたてた。

「君って学生だよな？」思い出したような言葉に、「ああ、うん。そうっす」菓子の欠片を一口して、虎杖は頷く。

「高校生。最近、こつちに越してきたんだ」

「へえ、そうなんだ。多分私立でしょ？ 制服自由っぽいし」

「え、あー……」と、虎杖は一瞬、頭を巡らせ「ああ、うん。そうだよ」呪術高専の表

向きの姿を思い出す。

「フード好きなの？」

小首を傾げ、向けられる間。視線は、虎杖の襟足でぶら下がるフードに。

「あー……」

別に好きというわけではない。なにせこれも五条が勝手に付けたものだ。私服もパーカーだとかが多いが、好きかどうか言われると、ちよつと悩む。別段拘っているわけではない。

「なんつーか、すげー好きってわけじゃないんだけど、気づいたら着てるみたいかな。これも俺が付けたわけじゃないし」

「ほうほう」

「だからまあ、そうだな……」ぼりぼりと頬を指で掻き「トレードマークってとこだな、うん」

「いいね。良い落とし所だと思う」

「……そうかな？」

「そうだよ」

訊けば微笑みが返ってきたから、虎杖はとりあえず、そういう事にしようと思った。

「さてと、」と朱音はベンチから立ち上がり「私、そろそろ行くね。これから仕事なん

だ」

「そうなんだ。頑張ってください」

「ん、じゃあこれ」

そう、朱音から差し出されたパッケージを虎杖は素直に受け取ると、

「菓子……?」

『ウマすぎ棒!〜スクラローズ味〜』——見慣れない商品名だった。好んで買おうとは思わないな、なんて虎杖は感想を抱く。

「五条さんによろしくね」

「……え?」

——思わず顔を上げた時には、そこには誰も居なくて。ただ夕日が差すだけだった。姿形もない。痕跡もない。立ち上がって、周囲を見渡しても動きを見せるのは、寂しげにそよぐ萎びた雑草だけ。

「あの人、呪術師か……俺の誤魔化し無意味じゃね?」

十十十

「こんばんわ、へピンキーラビットファーさん、でいいかな」

厚い紙コップの底がテーブルを軽く鳴らした。スマホに集中していた少女は、声を掛けられた事に気づいて、急ぎ顔を持ち上げた——と、想定よりも遥かに高い身長にちよつと首が辛そうだ。顔もそこそこ驚いている。

「は、は、は……！」

それでも出た返事は、慌てたせいかやや上擦っていた。

某喫茶チェーン。緑地に女神のマークがトレードマークの店。コンビニなどでもコーヒーやカフェラテといった各種ドリンクを販売している有名店。その一角に、空木田朱音の姿はあった。

テーブル席。向かいには、少女が一人。制服姿と見た目から推察するに、中学生から高校生。そわそわと落ち着きがない少女。彼女の前には、クリームで甘やかに彩られたフラペチーノから緑のストローが伸びている。量はあまり減っておらず、溶けた様子もない。注文から間もないのだろう。

「とりあえず、そうだね……ダイレクトメッセージの画面、一応見せてもらっていい？」

腰を掛けた朱音が言えば、彼女は素早くスマホを操作。ものの数秒で該当画面を画面に映して、見えるように差し出す。朱音も同じように画面を差し出した。すると、二つのスマホに同様のやり取りが映っているのが見て取れた。

「——はい、改めてだけど、初めまして、ヘノワールブラック・イタコンです」

「初めまして、へピンキーラビットファーです」

「じゃあ、早速本題だね」

ホットコーヒーを傾け、唇を湿らせた朱音は、集まった理由へ話を切り出し、  
「誰を呪えばいいのかな？」

穏やかに微笑む——空木<sup>カラキダ</sup>田<sup>アカネ</sup> 朱音は、呪詛師だ。

人を呪い、殺す。そういう事を彼女は、生業にしている。



## # 2

十十

「つまり、お兄さんを馬鹿にするやつを呪いたい?」

「はい、そうなんです!」

勢い良く彼女は首肯。表情は真剣そのもの。遊びで無いことがよく分かる。

「酷いんです。確かにお兄ちゃんは冴えた顔じゃないです。イケメンでもありません。血の繋がりもないです。だけど、お兄ちゃんなんです。私達のたった一人のお兄ちゃんです。私達を育ててくれたお兄ちゃんなんです」

ぎゅつと膝の上で握られる手の圧は強く。白い肌を更に白く染める。

「お兄ちゃんに、”私”のお兄ちゃんに酷いことを言うクラスの人たちは私は許せない」

「どうして、そんな酷いことを言うのかな」

「……お兄ちゃんの職場で火事があったんです。それでお客さんとか他の店員の人が皆な亡くなっちゃったんですけど、お兄ちゃんは、直前に辞めてたんです。だから」

「火事、ねえ……」

「普通、放火とかするんだったらそんな急にしようってならないじゃないですか。」

なのに、皆、皆、お兄ちゃんがやったんだって……!」

溢れる言葉に、朱音は確かな憎悪を見た。お巫山戯じゃない。表情と声は真剣。吐き出される色合いは明確な黒を宿し、確かな呪いがあった。

「分かった。呪おう。君の呪いを届けよう」

確かな肯定。朱音は、彼女の憎悪に呪いが必要だと感じ取った。

「本当ですか……!」

「勿論さ」

ぐいっと興奮に上気した顔を近づけるへピンキーラビットファーに、朱音は穏やかに頷いてみせる。

「じゃあ、報酬の話をしようか」

「あ……、そ、そうですね」

流れるように、朱音が話を移行させると興奮冷めならぬへピンキーラビットファーの顔がやや曇る。

一応、彼女も頭の片隅にはあったが、今の今まで感情を吐き出すので夢中で視界に入っていないかった。だから今、朱音の言葉で、夢から覚めたような心地に陥りながら、固唾を呑んでいた。

「……私はね、必要な呪いの度合いでメニューを作つて、それに見合う報酬を貰うようにしてるんだ」

滔々と語り出した朱音に、〈ピンクキラービットファー〉は、唇を硬く結んで、耳を傾ける。

「だけど、例外がある——君みたいな、心底、呪いを必要としていて、私と対面で会う勇気のある人。こういう人はね、別なの」

「じゃあ……!」——〈ピンクキラービットファー〉の顔に、パツと希望が蘇る。

「そうだね。君の可能な範囲の金銭、もしくは、」一旦言葉を切り、「君に渦巻き、わだかまる呪いを貰おうか」

「の、呪い?」

よく分かつていなさそうな表情を〈ピンクキラービットファー〉は、浮かべる。そもそも、素人だ。呪いにも正直、彼女は懐疑的。

「そうだね、噛み砕こう。君が感じる事は一つ——」

朱音の視界には、〈ピンクキラービットファー〉に絡みつく呪霊がある。

蛇のように長い胴で少女の首から体を締め上げ、尾の先で股座を押し付けられ、不規則に生えた腕は上半身を撫で回している。先についた蛙のような頭のニヤつきは酷く不快、不潔、不愉快。

普段から向けられ続けた思念と彼女の内側から滲む感情が育てた呪霊だ。年頃の少女には重たい荷物だろうから、

「体が軽くなる、かな」

人を安心させる笑顔で、朱音はそう言った。

十十

「おーかえりー」

ばかりと煎餅の破片が散った。

都立呪術高専学生寮。寮である以上、生活に必要な施設は揃っている。その一つがこの食堂だ。

煎餅片手の五条悟は、件の食堂の一角にあるテレビの前を陣取っていた。他に人は居ないから迷惑ではないのだろうが、六人がけの大きなソファで寝転がり、だらしなく煎餅を貪るさまを見て、初見で呪術師としての力量を見抜くのは難しい。分かることは大

の大人がめちやくちや行儀悪く菓子を食べることくらい。しかも目隠ししてる。食べにくくないのか。

「ただいまー。煎餅とか珍しくね?」

「たまにはさ、世間の塩っぱさを噛み締める必要が大人にはあるんだよ。ていうか、遅かったじゃん。アイス買ってきてくれた? ハーゲンダッツの新作だぜ? 食後のおやつはあれに決めてるんだ。それ以外は認めないよ?」

「……………あつ」

さつと、虎杖は目を逸らした。完全に忘れてたのだ。なにせ色々あったものだから、虎杖は完全に当初の目的を忘れていた。

事の起こりは、寒くてコンビニに行くのが嫌な五条が言い出し、隣でテレビを見ていた虎杖が巻き込まれたのだ。

じゃんけんに負けたほうがコンビニにパシリをする。なんて事を教師と生徒がやっていいものかは、まあ、この二人なので置いて置いておく。察しの良い皆様には、もうお分かりだろうが、虎杖は間抜けだった。相手が常に目隠しをして歩いていて変態だというのを失念していたのだ。じゃんけん程度の心理戦なんてこの男、五条悟にはお茶の子さいさい、スケスケみるみる。

虎杖も持ち前の身体操作と反射で頑張ったのだが、無下限術式には無意味だった。そ

れでいいのか五条悟。それでいいのだ。

「今度の課題、倍ね」

ぶーたれて、ばきつと煎餅を齧った後、五条はテレビを見て笑う。めちやくちや大人げない。

「ひっでえな！ それでも教師か?!」

目を剥いて叫ぶ虎杖に、「ほらほら、落ち着いて」と差し出されたのは、

「え、まだあつたの……?」

ペプシコーラ。

「はっはっは、コイントスで増えた」

「いやいや……ていうか、煎餅にペプシって食い合わせどうなんだよ……」

ツツコミが面倒くさくなった虎杖は、とりあえずキャップを捻り、ゴクリと一口呷る。うーん、キンキンに冷えてる。秋でもペプシは冷えてないと。虎杖は喉を抜ける炭酸の心地よさに、くうつと声を洩らした。

「あ、そうそう。代わりに」

ローテールブルにガンガン。どんつと重量感。

「え、ガンガン……?」

五条悟、困惑。とりあえず手にとって、ぱらりと捲り、

「え、藍蘭島まだやってるんだ……」

呪術高専最強の呪術師、五条悟。流石にシヨックを隠しきれない。連載約十七年ほど。恐るべき連載期間。驚異的に他ならない。

「あと、先生によろしくつてさ」

件の味の予想がつかない駄菓子を五条の前に、一人がけのソファに虎杖は腰掛け、ローテーブルに積まれた小袋一つをぴりつと開けた。

「ねえ、悠仁。これ貰ったの、女の人だった？」

「ん？ うん、そうそう。五条先生よりでかくてビビったよ。ありや、東堂よりでかいね」

「……帰ってきたのか、朱音」

「うわっ……すげえ微妙だ、この組み合わせ……」ペプシと煎餅の味の混ざりに呻き「あ、やつぱり知り合い？」

ぼつりと零れた眩きを虎杖は、聞き逃さなかった。

「空木田朱音。元呪術高専所属呪術師」

「へえ、元」

「僕が知ってて放置している通り、呪術高専に所属していた頃の等級も最大で四級。率直に言って、戦力にはならなかったよ。呪力感知が頭一つ抜けてたからそっち方面で

の仕事が多かったね。

風の噂で、また呪術師になったとか呪詛師になったとか聞いたけど。まあ実際どうか」

「なあ、それってフリーで呪術師やるメリツト無いんじゃないかね？」

ぱつと浮かんだ言葉を虎杖が口にすれば、

「その通り。一定水準の能力がない呪術師は、群れるのが一番さ。そうじゃなきゃ呪術高専で大人しくするか、呪術を諦めたほうが生きやすい。

呪詛師は、基本的に危険思想とそれなり以上の実力を合わせて持っている事が多い。もつとも裏社会で犯罪に手を染めて生計をたててる呪詛師は少なくないよ、金になるからね。けど、結構リスキーだ」

首肯と共に五条から答えが返る。

「それでも、朱音は未だに一人で生きている——どうしてだと思おう？」

「……………他人と居れない理由があったから？」

「That's right」びしりと両手の人差し指を向け「彼女の呪術——いや、体質からそうさせざる得なかった」

「体質？」渋面の虎杖に、「うん、特異体質」五条は唇を濡らすように、ペプシを一口呑んで。



「呪いを引き寄せる、引き寄せ過ぎる体質。呪媒体質ってやつ。呪力感知で秀でてたつて言ったろ？ そののデメリットがメリットを上回つてき。高専から抜けて、呪いの集まりやすい東京からも離れたはずなんだけど」

「今になって戻つてきた？」

続く筈だった言葉を虎杖が口にし、五条は頷いて、煎餅の一欠片を口に放り込んだ傍から噛み砕き。

「いい思い出は、無いと思うんだけどね」

十十

「つしゆん……風邪かな」

空木田<sup>カラキダ</sup> 朱音<sup>アカネ</sup>は、一仕事終え、雑踏を歩いてきた。

日は沈み、街の彩りは夜のものに。時刻で言うと、七時を少し過ぎたくらい。昼夜で、街の姿は違う。特に、繁華街の変わりようは凄まじい。闊歩する人種、色や匂い、空気。何もかも日が出ている頃とは違う。

「思つたより手間取つちやつた……」

SNSでひっそりと仕事を初めてから半年。朱音は多くはなくとも少なくはない依

頼に恵まれていた。仕事の内容自体は些細なものが多く、呪殺に至った事は今のところ無い。小さな妬み恨みを細やかに叶えてあげる。それくらい。

ただ、難点が一つあった。

「……人が多い」

SNSでの依頼者は、大体が都内在住。彼女もそれに伴って引越した。が、都会はあまり好きじゃない。

何故なら、朱音は背が高い。雑踏でもよく目立つからというのもある。不用意に目立っていい立場ではない。なにせ無所属の呪詛師。敵ばかりだ。

更に、背が高ければ、他人よりも視線が通る。遠くまで見渡せる。普通、人が多ければ視線が通り難いものだが彼女は別だ。これは利点じゃないかと多くの人は思うだろうが彼女の場合は違う。人が多ければ呪いも多く。呪いとは視線を感知するものが多い。朱音の呪的体質は、彼女の身体的特徴で助長される——単純に、彼女が人混みが嫌いなのが都会嫌い的一端ではあるが。

そんな彼女の嫌いな雑踏の上を、ふわりふわりと呪いのなり損ないが雲のように漂っていた。こういうものは、人の集まる場所ではありがちだ。かと思えば、朱音の方に寄ってきたと同時に、消え失せる。朱音に取り込まれたのだ。

「……今日は、ちよつときついかも」

胸の詰まりと下腹部を中心に広がる疼きに、朱音は、顔を微かに顰めた。

朱音は、呪媒体質。呪いを引き寄せやすく、尚且、溜め込む特異体質だ。

夏油傑という、特級呪詛師が居る。この男は、類まれなる呪霊操術にて、数多の呪霊を手中に収めていた。それは特級呪霊ですら例外ではなく。特級の名をほしいがままにしていた。

それと、朱音は真逆だ。制御の効かない体質——操るといふ技能を彼女は身に着けられなかった。適正がなかったのだ。結局、出来たのは抑え込むくらい——だった。

彼女が自身の可能性に気づかされたのは、つい四ヶ月前。そして、もう一つの転機も四ヶ月のこと。

「あれは……」

ふっと、眩く視線の先に蹲るもの。誰も見向きもしない。朱音はそれへ雑踏を避け、近寄っていく。高い身長が雑踏を横切るから視線を引きがちだけれど人々は無関心に目を逸らす。都会の良いところ。良くも悪くも、良いところ。

「やあ、こんなところでどうしたの？」

少し路地の奥に足を踏み入れてから、蹲るものの前に朱音はしゃがみ込む。

「はぐれちゃったかな」

視線の先には、少年がいた。健康良好とはあまり言い難い様相。秋も深まる時候に、

伸び切ったタンクトップと薄っぺらなハーフパンツ。年頃は、十と少しか。三角座りて壁にもたれかかり、何もせず黙り込んでいる。

「そんな感じじゃ無さそうだね」

虚ろな瞳は、朱音を見ることはなく。ただ、地面を見ていた。先に目をやれば蟻が居る。死にかけの蟻。何かに潰され、もがく蟻。いずれ死ぬだろう。少年は、ただそれを見ていた。只々、じつと。

朱音はそんな彼の隣で、同じように膝を抱えた。寄り添うように、言葉一つ発さずに。

「見つけたぞゴラー！」

いくらかの時間が過ぎた。長くはない。短い、ごく短い時間。雑踏の足音がいくつか近づき、遠のいた時。

声が出た。男の声だ。ふっと、朱音は声の方を見やる。頭上、といっても朱音の身長が高すぎるせいもあって、

「うおっ！」

顔と顔の距離が想定よりも近かった。無精髭の目立つガラの悪い男。朱音の鼻を突いた口臭は、煙草と酒と他の何かが混ざって臭う。僅かに朱音の眉根が顰められた。

「でっけえ女だなあ、はは。乳もケツもでけえ」

デリカシーもない。朱音の中の好感度はだだ下がりしつつあった。

「そのガキ、うちの何だよ。連れて帰るからよお、そののけや」  
顎で差す先には、やはり少年。しかし、見向きもしない。相変わらず蟻を見つめてい  
る。

「どうするっ？」

「……………」

沈黙も変わらず。けれど、朱音は彼の瞳に感情を見た。小さな水溜りに、水滴が一つ  
落ちるくらい微かな揺らぎ。

瞬間、蟻が潰された。親指と地面の間ですり潰される。少年の小さな親指が執拗と呼  
べる程に。

「気持ちわりいなあ、おい。殴りすぎて馬鹿になっちまったか？」

「……………そっか」

それぞれがそれぞれの反応を見せた。嘲りと理解の頷き。

「分かったよ」

「……………んだよ、てめえ」

艶やかに赤髪の毛先を揺らし、朱音は立ち上がる。自然と目線が上がり、男を見下ろ  
した。見上げる側と見下ろす側が逆転する。見下ろすのは、それだけで威圧的だ。男の  
言葉が遅れたのはそのせいだろう。

「それが君の望む呪いなんだね。はは、いいよ。ご依頼承りました」

「あ、あ”?” てめえも意味分かんねえことくちやべりやがって。ぶつ殺されてえのか  
!!」

「いや、ね」

そう切り出した彼女は、満ち満ちていた——まるで、迷いが晴れたように清々しく、  
吹っ切れた顔だった。

「私と君の末路が決まった。それだけよ」

## #3

「子宮、か……」

「正確には類似物だ。子宮によく似たものが被害者の臓器で作成されていた」

虎杖は、眉根に皺を寄せ、スマホに映っている画像を見つめていた。スプラッタ。赤黒く、生々しい。生の発露は夥しく、その顔面を見れば精魂既に尽き果てた事が明白だった。

写真の主役たる男性は、風船でも押し込んだように腹が腫れ上がっている。それがうち側から引き裂かれていた。力づくで、荒々しい傷跡が目を引く。これが死因とのことだ。

「子宮……中身は？」

「無かった。入っていた痕跡はあったが、腹と同じ手管で裂かれていた。そこに、呪霊がいたと見て間違いねえ」

「なるほどね。で、」振り向く野薔薇。つられて二人も振り返る。

「ここに、その死体が詰まっていたと」

10月XX日。新宿区歌舞伎町。

XXマンションにて多数の遺体が発見された。

遺体は、どれも腹部に奇妙な爆傷めいた傷があり、爆発物の痕跡やその他凶器の痕跡なく、内蔵を無惨に破壊されていた。

屋内各所に設置された監視カメラの映像に、誰の手も何の手も触れずに内側から引き裂かれていく被害者の姿が映っており、目撃した警備員や逃げ出したその他住民からの通報から呪霊案件として立件承認——呪術高専の出番となった。

「被害者は共通してこのマンションを所有していた暴力団の団員。全員が違わず、同じ呪創で死亡しています。その他、関係者に被害者は居ません。それが早期の発見に繋がりました」

瘦躯の神経質そうな男——伊地知は、つらつらと現状を三人に伝えていく。

「残穢は？」——伏黒が手を上げ訊く。

「呪詛師と呪霊の半々と言ったところですね。濃くもなく、薄くもなく」

「……特級の仕業っぽくないな」——虎杖が洩らすと。

「はい、彼らは自分たちがどういう立場なのかを理解しています。つまり、不用意に目立った行動はしないということですね」



「となると、今回の相手は……」伏黒の言葉を、「呪霊を使った呪詛師辺りが妥当ね」野薔薇が繋いで完成させる。

「そうなります」

伊地知は肯定と共に頷いた。

「目星はついてんの？ 伊地知さん」

「問題はそこで……」神妙な表情を浮かべ、「困ったことに、中で死んでいた者に呪詛師が居まして」

「え、呪詛師も死んでたの？」

「呪詛師の死体に残穢が最も濃く残っていました。どうやら、大元はそのようです」手元のタブレット端末に伊地知は視線を落として、

「件の呪詛師は三流……四流どころですね。大した実績も腕もなく、こういった非合法組織に潜り込んでいたとのこと。珍しくないタイプです。あまり表沙汰にできない呪いを手繰っていたようです」

「表沙汰、ねえ……。どういふのよ？」

胡散臭そうな顔の野薔薇が訊けば、伊地知は、重く口を開く。

「生贄です。どこかの呪術書ふるほんを読み齧ったのか、誰かの見様見真似か。そういうものを使う輩です。こういったタイプが、現在の呪術界限では、ありがちで少なくないのが

嘆かわしいですね。

この男は、闇金運営に携わっていたようでして、借金のかたに仕入れた女子供を使った悪趣味な呪術で恐喝を行っていたとのこと。ちよつと現代日本だと信じ難い話ですが」

「……酷えな」

凄惨な光景を脳裏に浮かべていた虎杖の感想は、短いながらに心情がしつかりと乗っていた。

「ええ、酷いです。男に与えられた部屋はそれはもう酷い有様でした」  
響めつ面は、きつとその光景を思い出したからだろう。

「だが、そいつも死んだ。人を呪わば穴二つ、呪詛返しでも食らったか……?」  
独り言めいて眩きながら口元に手をやり、伏黒は思案する。

「で、件の呪霊はどこに行ったのよ」

「マンシオンからは既に離れているようです。遺体と同じ残穢がマンシオン周辺で確認されました。が、ぷつぷつりと途切れていまして。おそらく、呪詛師が回収したと思われます」

「じゃあ、俺達はそれを?」

「はい。皆さんには、その呪詛師候補を追っていただきたいんです」

と三人の前に差し出されたタブレット。覗き込めば。

「あつ……」

虎杖には、見覚えのある顔が映っていた。

「彼女を探して頂きたいんです」

空木田朱音。タブレットに映る彼女は、虎杖の記憶よりも少し若かった。

十十

「うん……？ 何だこの臭い」

一人の老人が山中で、異様な臭いに顔を顰めていた。

季節は、秋も中頃。老人は、この辺りの山主であり、寺で住職をしている。

寺の周りをジョギングするのは、毎朝の日課で、今日もそのつもりだったのだが、鼻を微かに衝く刺激臭。初めて嗅ぐ臭いに、『なんだろうか』と首を傾げた老人は、臭いの強まる方に向かった。

向かいながら、鼻孔に入り込む臭いから、老人の脳裏に過る可能性。獣の死体——この辺りは、人里に近いため熊は、そうそう出てきはしないが他の狐や狸なら出てくる。なら他だ。不法投棄。そう周りの山主から聞いたことがある。自分の山では、まだ無

かったがついに……というのも考えられた。

列挙した可能性に憂鬱になりながら、木立を抜け、枯れ葉を踏みしめ、臭いの方に足を進め——ふっと抜けた風に、大きく顔を響めた。耐え難い臭い。次に感じたのは、耳朶を打つ耳障りな羽音。

これが、臭いの大元だと老人は確信した。視界を遮る高い草を掻き分けて、見えたのは、一際大きな樹木——揺れる大きな影があつた。枝葉では断じてない。これこそが臭いの大元だ。

「——つ——」声ならぬ悲鳴が乾いた唇の合間から零れた。

大きい。一般的な成人男性を大きく上回る身長だ。しかし、男ではない。

女が揺れていた。女だと老人が直感的に理解したのは、長く黒々とした大量の毛髪が落ちていた。頭皮が腐り、根本から刮げ落ちたのだ。そこに覗いた顔が女のものだった。服装は、山に登るのに全く向いていない足首まで覆うロングスカートや厚手のセーター。元の色はもう伺い知れない。各所に滲み広がる何とも言えない液体が鮮やかな過去を塗りつぶしていた。

見た限り、長期間ここに居たらしい。老人のジョギングコースから外れていたから、中々気づかなかつた。合わせて、この気候。秋も深く、冬は近い。それが腐敗の進行と風向きで発覚したというのが大筋だろう。

「なんと、まあ……」

まず老人は、手を合わせた。住職であつて僧侶だ。いくら酷い状態でも人は人。いくら他人の領域で自死しようとする人は人。人が自死を選ぶ時は、まず追ひ詰められた時だ。心や体が限界まですり減らされた果てに辿り着く。それほどに苦しんだ人を老人は、無碍に出来なかつた。

だがしかし、事件性があつてはいけぬ。まずは警察だ——山中でも何とか電波が届く。というか届くように老人は、基地局を近場に設置してもらつてゐる。ジャージのポケットから取り出した年代物のガラケーで警察に連絡をとボタンを押す。

その時、老人は泣き声を聞いた。指が固まる。声は止まない。人のもの。それも幼い。

かちりかちりと重く。壊れた玩具のように、ギンギンと視線を泣き声の方に運び。

「まさか」と、呟いた。

声は、揺れる影の下にあつた。重なる毛髪と蛆の湧く屍肉の奥から聞こえてきていた。

「みんなと遊ばないのかい」

「……………いいい」

無気力に、ゆるりと。足元で、蟻の手に解体されていく名も知れぬ虫の死骸を見下ろしたまま、少女は首を振った。

「……………そうか」

老人は、それ以上、言わなかった。幾度か繰り返した問答だ——いいや、問答というほどのコミュニケーションはない。ただ、老人が気まぐれに問い、返答を聴く。それだけの事。

彼女が、あの遺体の下で拾われてから、十三年が経とうとしていた。

警察に保護され、身元が調べられた結果、身寄りはなく、施設に送られるところだったのを発見者の老人が引き取った。

姓は、空木田、名は朱音。

姓は、自殺していた母もの、名は、老人が付けた。

大人しい子で成績も中の上。学校での評判は、文句の付け所はなく、悪くもない。別段、虐められている様子もない。ただ、子どもたちには、あまり馴染めていないと老人は聞いていた。

教師の言葉は間違いなかった。物心ついた頃から、彼女はそうだった。

「どうした、ものかな」

悩みは絶えない。子育てにしては、間違いなく手がかからないだろう。騒ぎもしない。好き嫌いもない。言わずとも悟る。物覚えもいい。何一つ文句はない。

けれど、子供にしては不自然だと老人は思う。出来が良すぎる。だが、それもこの子の特性なのかも知れない。

——受け入れなければならない。

老人の時代は終わり、移り変わった。幼い頃の様にはしてはいけない。あの頃は、人に非寛容だった。違うものを受け入れられなかった。だから、見守り続ける。

傍にしゃがむ少女、朱音を見やると、別の方を見ていた。視線を追ってみると地面から傍の林の中にやっていた。

「……お父さん」目は逸らさず「また、居る」

微かに震えを見た。朱音が見えるようになったのは、ごく最近の話だ。まだ慣れていないようで、怯えは消えていない。

「ああ……気にするな」

「でも……」承諾しかねるような声。「見なければ、居ないと同じだ。それに」老人は一度、言葉を切り。

視界に映る奇つ怪な影——呪霊。しかし、大したものではない。霊として形を保って

いるとも呪いとして成立しているとも言えない。低級どころではない。等級にも入らない。

「あれは、影のようなものだ。目に入れなければ、いずれ消える」

住職である以上、見慣れていた。この辺りは、田舎で都会よりも遥かに呪霊の程度は低い。なんの言い伝えもなく、静謐以外取り柄のない村だから。よくある村民感の軋轢が生じるほどに人も居らず、人々に情熱もない。近い内に消える場所だ。

朱音もいずれ慣れるだろう。日常に呪霊の影も溶けていくはずだ——老人は、そう思う。自身がそうだったから。

そしてまた、何かを求める事も、困る事もあるだろう。それに、苦しみ、嘆く事もあ  
るだろう。

誰かを必要とする時に、自分が傍に居れたならば、支えにも指針にも道にもなろう。老人はそう思った。

——後日、老人は床に伏した。その三年後、彼は、この世を去った。

十十十

「呪術高専から参りました」



「……はい、父に聞いています」

——お前には、呪術の才能がある。

死に際に、父はそう言っていた。ついでに、スカウトの人も来ると。なんだそれは、聞いていない。朱音は、微妙に憤慨した。何故この様なものを寄越したのか。どうして何も言わずに。

そう思い、小さな怒りが芽生える自分が居るのと同時に、小さな感謝を覚えた。

「どうぞされますか？　我々、呪術高専は、強要致しません。」

呪術高専に所属に際して発生する費用は、全てこちらで負担致します。何らかの理由による退校で何かしらのデメリット等は生じません。その他詳しい内容は、貴方の意思を聞いてから書面にて、お話し致します」

呪術高専の関係者を名乗った神経質そうな男は、ゆっくりと言葉を並べると伺うような視線で朱音を見上げ、問う。

大の大人に見上げられるほどに、朱音は成長した。三年の時間は、彼女に大きな変化をもたらしていた。老人が生きていれば言うだろう。

——母によく似たと。

「……………行きます」

決心に、時間はかからなかった。

「や！ 君が新入生？」

「あ、はい。空木田朱音です。宜しくお願ひします」

「はいはい、よろよろ——……」

まじまじと……見れているのだろうか。朱音はまじまじと見る動作だけに見える先輩の前に、小首を傾げた。

「大きいね、君」

不躰で、馴れ馴れしい男だと朱音は思った。それでいて胡散臭い。丸サングラスに白髪。軽薄な笑み。胡散臭いの固まりだと。

「よく言われます」

「あ、やつぱり。今からマツク行くんだけど行く？」

「え……まつく？」

「え……知らない？ マジ？」

でも、眩かった。田舎の山に森、田畑から離れ、都会の輝きに目が慣れつつあつても五条悟は、眩かった。あの笑顔が、あの傲慢さが。朱音の知らない事を幾つも知つてい

る彼がととても朱音には、強烈で。

日々を過ごせば過ごすほどに、憧れは積み重なる。憧れなんて、とてもじゃないがおこがましく。そんなことを考えること自体、朱音にとつて、憧れを冒瀆する行為だった。

不甲斐ない自分がそんな事を思つてはならない——朱音は、自罰的だった。

それなのに、あこがれとはまた違う感情を抱きつつあつた彼女は、心の底に感情全てを押し込めて。

十十十

——呪術高専を去つた。

## # 4

「美味しい？ そっか。良かった」

喋る代わりに、食らいつく。パンズとチキンパティが無惨に千切られ、合間に挟まれたレタスが悲鳴を上げる。人が感じるのは、味蕾の上で踊る味わいだけ。朱音もやはりそう。嘔み潰し、呑み込んだ。次いで、コーラをずずつと啜り、口に残った欠片を喉の奥に流し込む。

大手ファーストフード店。時刻は昼前。都心なこともあり、人の数は順調に増えつつある。この一角、二人がけの席に朱音と少年の姿はあった。

「お父さん、お母さん。居なかつたね」

呪孕ノロイムラミ——空木田朱音が所有し、半年前、朱音がようやく理解した自らの術式の一端である。

対象の体内に、子宮（と似た臓器）を形成し、彼女自身が体内に孕んでいる呪霊を孕ます対人術式。呪霊には何の意味も成さない、呪殺のみを念頭に置く凶悪無比の殺人呪

法。

孕んだものは、いずれ生まれる。生まれた呪霊は、己を形成する呪いの行動規範に則り行動する。

件のマンションが壊滅したのは、孕んだ呪霊が少年の呪いにより生成されたからに他ならない。それほどに強烈な呪いだ。

全てを奪われた少年の呪念は、あまりにも恐ろしい。

「……………」

「このスマホの住所、当たってみようか」

「……………」

一見して、一方的な言葉の投げかけだった。片方は只々、バーガーを咀嚼し、片方は咀嚼と合間に言葉を作る。

朱音の手元にはスマートフォンが一台。あの路地の、ガラスの悪い男から手に入れたものだ。指紋認証も考えものだねと朱音は、タッチパネルに指をつつと滑らせた。

「これとか近いね」

住所は、豊島区池袋にある雑居ビル。現在地から電車で数分。

コンビニにソーブ、サラ金、バーと詰まったビルだ。所属しているソーブ嬢のSNSアカウントから見ると、あの惨事の後でも開いているらしい。これもスマートフォンの

持ち主である男のSNSアカウントから確認できた。

「お邪魔できそうだ」

朱音は、スマートフォンをスリープにして、羽織ったダウンの内ポケットに滑り込ませた。

「でもまあ」少年の食事進捗に目をやり「もうちよつとゆつくりしようか」

ポテトを一本、サクリと。

「最近さ、まずいだとか何とか色々言われてるけど、私はやっぱりマック派。君はどう？」

「……………食べ、るの、初めて」

ようやく、少年が口を開いた。ぼそぼそと聞き取りにくい声。詰まりがちで話慣れていない印象も感じる。

「そっかそっか。それはよかった」

二本目、サクサク。

「初めて食べたのが一番美味しいファストフード。良い思い出になるよ、きつと」  
「……………うん」

「私のオススメは、色々あるんだけど、」手元のバーガーを見せ「チキンファイルオ。美味しいよ」

「……………そうなの？」

小首を傾げる少年に、朱音は強く頷いてみせる。

「そうともさ。チキンはサクサク、レタスはシャキシャキ。タマネギがちよつと辛くて、オーロラソースは甘酸っぱいんだ。

君のはどうかな？ お月見バーガー、時期ものだから今しか食べれないんだよね。私もチキンファイルオとちよつと迷った。チキンファイルオは毎日食べれるしね」

「……………美味しい」

「それはとても、よかった」

ポテトを二本、まとめて口に放り込む。ちよつぱりしなり、ちよつぱり塩っぱい。

「あー……………美味しいなあ……………」

朱音はチキンファイルオを頬張って、呑み込むと、

「無くなっちゃった……………」

ぺろりと指についたソースを舐め取り、名残惜しげに呟き、「ああ、そうだ」と立ち上がる。

「マックスエイク買ってくるよ。呑む？」

「……………？」

首傾げる少年。マックスエイクが何か理解できていないのだ。

「あ、そっか……よし、」ふふんと広角を上げ「マックスエイクは、最高だよ？」  
カツンとブーツを鳴らした。

「……私、何やってんだろ」

と、そこまでやって朱音は、レジ前で我に返った。ちよつと冷静になったのだ。

人を何人も殺しておいてだが、ここまできがあまりにも衝動的すぎる。自暴自棄だろうか。もしくはあてられたか。

首を捻つても答えは出ず、気づけば順番が回ってきていて。

「マロン、か……」

新商品に、朱音は目を奪われていた。

十十十

『監視カメラに彼女の姿が映っていました。映像はこちらに』

虎杖の脳裏に、伊地知の言葉と映像が蘇る。

前日に見たのと変わらぬ姿、虎杖の知っている朱音の姿。隣には一人、知らぬ顔。少年。細く、骨張った様子は栄養の足りなさが見て分かる。二人は、手を繋いで歩いてい  
た。マンションから逃げ出す人々の中に紛れ、平然とゆつくりと。



『皆さんに追跡をお願いするのは、虎杖くんが顔見知りとのことなので——ああ、これ、五条さんからの命令です。私としては、まだまだ等級が上がりそうな相手は、あまりお願いしたくないんですが……』

そう、いつものように困った顔で伝える伊地知も克明と描かれる。

『違えばそれで構いません。違わなければ、捕縛は容易でしょう、と過去のデータから算出した実力差から五条さんは見ています。私も、今の皆さんの実績と実力を照らし合わせてたらそうなることは間違いないと思います』

『ただ、現状の被害から見て……不穏です。無茶はしないでください。これ、いつも言ってますね。え、五条さん？ ああ、別件でして……』

また、伊地知は苦笑していた——そこで、虎杖の視界は現実に戻る。

揺れる吊り革。流れる街並み。空いてる車内。平日の真つ昼間。山手線でも空いている時間帯だ。

「まあ、怪しいよなあ……」

ぐぬぬ……と虎杖は唸る。

どう見ても怪しい。誰がどう見ても怪しい。呪術師が態々、こんなところを歩いている。何の気負いもなく。しかも偶然？

虎杖は、首を振る。いやーありえない。絶対にありえない。

確率はゼロじゃないけど、でもほとんどゼロじゃないか。虎杖は自身が数学がよく出来る方とは口が裂けても言えない。だけど分かる。これはゼロではない。けれど、ゼロに近い。つまり、犯人に最も近い。

推定敵対：呪詛師。

何より、過去のデータよりも実力を高めていることが予想される。何らかの呪物を所持している事も考えられる。難敵の可能性が大。なら加減はできない。

「ねえ、虎杖。あんたつてさ」

隣で電車で揺れる野薔薇は、うんうん唸る虎杖を横目で見て、

「年上好きだったの？」

ふとした疑問をぶつけた。

「……………え?! なんで?!」

「いや、なんかあの女知り合いなんでしょ? 初恋の人? いいわね、そういうの。私好きよ? 初恋の人と運命の再開とか昔の住んでた家の隣のお姉さんと再会とかいいじゃない」

「いやいや、昨日会ったばかりだから」

「え、そうなの?」一瞬、つまらなそうな表情を浮かべ「あつ! あれね! 一目惚れ! それも好きよ!」

パツと笑顔に切り替えると、びしつと人差し指を立て、ピンときたとばかりに言う。「それも違うから。違うから。どうどうどうどう」

「何よ、つまらないわね……。それで、どういう出会い？」

「あーそれがだな……。まるまるさんかくしゃけしかじかうまうまぱんだ」

虎杖が簡潔に説明すると、

「はっ?! なにそれ! 結構ロマンチックじゃない! 虎杖の癖にやるわね!」

野薔薇のテンションは爆上がった。思わず座席から立ち上がりそうになるくらいに。

「ええ……。そうかあ……。? 結構気不味い空気だったぞ」

「その後、二人つきりで話したんでしょー? なら、脈アリよ。アリよりのアリよ」

「そうかー?……。いや、待て。俺はそういう目で見てないから。そういう方針じゃないから」

なんて虎杖が訂正しようとする。

「おい、次で降りるぞ。池袋はこの次だ」

隣でスマホを触っていた伏黒が話に入ってきた。

「言われなくても分かっているわよ。ブックロなんて庭よ庭。山手線ゲームで私に勝てると思っつて?」

「五条先生とやってろ」

目撃情報や監視カメラの映像等から、対象である空木田朱音の向かった先が、池袋だと伝えられた虎杖達三人は、電車で揺られていた。

対象が何故、池袋に向かったのか？ 呪殺の理由が私怨等であるなら、これからもさらなる呪殺を重ねるだろうという推測の下で情報の精査すると、池袋の雑居ビルに事務所を据えている事が判明。

可能性の真偽を確かめる為に今、虎杖達は派遣されていた。

「……なあ、伏黒」

「なんだ」

「普通の呪霊、普通の呪術師に、あれだけの人を殺せると思うか？」

虎杖にしては、重々しい切り出しだった。伏黒には、その内心が透けてみえた。分かりやすいのがこの男の美德だ。

だから、それなりの言葉を返してやろうと口を開く。

「お前の言う普通がどれくらいかによる。が、まあまず普通、三級未満の呪いには、無理だ」

断言し、

「だけどな。あのマンション、曰く付きだ」

「曰く付きっ？」

「調べてみたんだが、どうにもあのマンションで数年前、結構な人数が死んでいる」  
「やっぱり、暴力団絡みか？」

「ネットの記事だとそうなってるし、伊地知さんにも確かめた。殺り方も人の範疇だった」

「なんか引つかかる言い方するわね」

会話に入ってきた野薔薇。確かに。虎杖もそう思った。

「射殺や刺殺の中に……」言い淀み「真つ二つが混ざっていた」

「真つ二つ？」

「文字通り、脳天から一直線に」

「うっへ……残穢は？」

「無い。周囲にわだかまった小さな呪いの気配はあっても呪殺や呪霊は確認できなかったらしい。所有者が所有者だから何かあってもおかしくはないがまあ、十中八九、お前の同類だろ」

お前が指するのは、勿論虎杖。心外とばかりの表情で、虎杖は口を尖らされた。

「いやいや、流石に無理でしょ」

「呪力抜きの手で、コンクリぶち抜く奴が何言ってるのよ」

「つーかお前、オーバースローで鉄球投げてた上に呪霊に殴りかかってたじゃねえか。

呪力無しで」

「え、いつよそれ。初耳なんだけど」

「宿儺の指食う前」

「は？ キモ……」

「東堂もそれくらいできるし……！ 後、ナチュラルに罵倒するのやめて！ 傷ついちやうから！」

「なんの言い訳にもなっていないわよ」

「つまりだ。あれだけ立地が良ければ普通も普通じゃなくなる。雑魚もただの雑魚じゃなくなる。」

「……杞憂ですまないかもな」

伏黒がまとめると、急激に電車の速度が落ち始めたのを虎杖達は、感じた。ブレーキが速度を殺して、直ぐに停止。その後、気の抜けた音と共に扉がスライドして、到着のアナウンスが車内に鳴り響く。

アナウンスに従い外に出れば、池袋駅山手線ホームに到着。平日真つ昼間だが、やはりそこそこ人がいた。

「で、どつちよ」

「庭はどうした。庭は」

呆れた風な虎杖に、野薔薇は口を尖らせる。

「降りた場所がいつもと違うのよ。全く、やんなるわね」

「分かる。めっちゃ迷うよな。俺こないだ秋葉から品川まで歩いてたし」

「いや、体力お化けすぎるでしょ。ていうか気づきなさいよ。普通気づくでしょ。馬鹿なの？」

漫才に背中を向けた——内心馬鹿か?と思いつつ——伏黒はスマホでマップを開く。すいすいとスワイプして。

「北口からが近い。行くぞ」踵を返す足を止め「……言っておくけどな」

振り向いた伏黒は、虎杖に念押しするように睨んで。

「迷子にだけはなるなよ」

「ならねえから!」

十十十

「……………あれって」

——虎杖悠仁は、期待を裏切らない。

視界を横切る姿に足を留める事も、先に伏黒たちへの言葉を作る事もできなかった。

虎杖の集中力が桁外れだったから、等と付け加えておけば、虎杖の尊厳は保てるだろうか……どうだろう。



## #5

薄暗い部屋の照明は薄桃色で、居る者の輪郭を曖昧にする。そういう部屋が幾つもの雑居ビルの三階にある。

所謂、ソーブランドと呼ばれる性風俗店だ。

経営自体は、健全で、この店の——いいや、このビルに入っている店舗のオーナー達は、真つ白で経歴に傷はない。

……少しばかり語弊がある。経歴を白く維持するために、この店のオーナーをしている。真つ黒を真つ白なペンキで何十にも塗り重ねて、剥がれ落ちないようにするため。

維持対価として彼らは、件の暴力団の下での労働を強いられている。

労働内容は、様々な事情で身を切り売りするはめとなつた女達をこの店に卸し、働かせる。

この店はそういう風に回っていた。表向き女性たちは、彼女らの自由意志で所属している事になっており、警察も手をこまねいていた。

ただ、もうその必要はない。

オナーに、経歴は必要ないし、女達がここで働く必要もない。警察も大つぴらに踏み込めるだろう。

「ここも、ハズレか……」

ソープの部屋のドアを無遠慮に開けて、伽藍とした中を見渡しながら朱音は呟いた。

一昔前の流行曲が薄つすら流れる部屋に、命の気配はない。在りし日の残影だけ。暗い部屋は死臭に満ちていた。女と男だったものがベッドに横たわっている。二つとも荒々しく腹が裂かれ、絶命している。ただ、平らな腹ではなく、内側から膨れている。まるで、妊娠でもしていたような。

男が孕むなどあるわけがなく、孕んだ女がこんな所で男の相手を出来るわけもなく。興味を無くした朱音は、踵を返す。今でソープの部屋は最後だ。上層に向かうべく、出入り口に彼女は向かう。上の階は、サラ金やバー。望みは薄いがそれでも、客だったものや従業員だったものが転がる受付を抜け、階段フロアに踏み出した朱音の背中を、

「うわっ」

強い衝撃が襲う——カンカンカン！と階段を勢いよく下り、すぐに消えた後ろ姿を朱音は見えて。

「あー……………」

追いかけるかどうか少し迷ったが、まあ良いかと朱音は、上り階段に視線を向けた。どうせ追いかけても結果は同じだ。

殺人への忌避感、相手が良かったのか簡単に吹っ切れた。あの路地で呪詛師を殺した瞬間、朱音の後ろに千切れ飛んでいった。それに、走り出せば後は止まらなければいい。そうすれば、ランナーズハイに浸れる。

養父が知れば、何と言うだろう。朱音は、狭い階段を登りながら自問する。養父の伝手もあって、朱音は呪術高専に入学した。きつと、呪いに向き合う為、呪いに立ち向かう為だろう。それがこのざま。怒るだろうか。失望するだろうか。朱音は、養父が感情を顕にするのを見ることはなかったから、想像は難しかった。

だが、まあ、深い溜息を聞けるだろうなど、朱音が亡き養父に思いを馳せていれば、階段が終わる。

すると、

「たずげ、で……………だずげ……………」

腹を抱えたスーツ姿の男が息も絶え絶えで、サラ金の入り口に倒れていた。虚ろに天井を見上げていた瞳が朱音の足音へ縋り付くように反応する。

「……………ちよつと聞きたいんだけど」男の頭上でしゃがみ込み、「ここに、男女二人組……………」

夫婦が連れてこられてなかったかな」

「だずげ、だずげて……………」

「話したら、助けてあげる」

朱音に、そんなつもりはない。というよりも、助けられる段階ではない。膨れた腹は、臨界を迎えつつある。出産は近く、生まれてしまえば後はない。

「しら、ない……………!! しらな……………!!」

「本当に？」

「ほ、んとう、です……………!!」

必死の形相が朱音を見上げる。朱音の唇から、嘆息が零れ落ちて——布を引き裂くような音がした。それはどこか小気味の良さすら感じさせ、次に生々しく柔らかかなものがべちやりと落ちて、床に汚らしい水溜りが広がっていった。

朱音は、背中から何かが入ってくる感覚に、眉を顰める。もう、慣れたことだが、何かしらの形で不快感を現してしまう。

男はもう動かない。朱音は、目もくれず立ち上がった。

「次は……………」

ラスト一階。最上階のバー。階段を登る手前に、サラ金の中を覗き込んで見る——ソープと変わらぬ惨状。ただ、あつたのは男ばかり。興味無さげに一瞥して、朱音は次

なる階段に一步足を掛けた。

ふと、朱音は顔を上げ、足を止めた。

数秒後。

呪力の炸裂と中身を覆い隠すように落ちてくる帳の感触、呪術師だ。

ちらりと上り階段を見て、朱音の内で走る思考。どうする。あまり時間はない。恐らく、降りていった女から生まれた呪霊と呪術師が遭遇したのだ。一体くらい、問題はな  
い。だが、呪術師と真正面から殺り合うのは非常に困難かつ、避けたい事象だった。

「……仕方ない」

反転し、階段を戻る。確か裏口が合ったはずだ。記憶を手繰って、朱音は階段を駆け  
下り、来た道に戻り。

「あの子、ところに……」

戻らなくては、と、呟いた。

十十十

「あんの馬鹿は……!!」

伏黒はマジギレ寸前だった。いや、既にキレている。激おこポンポン丸。マジギレナ

イフ。埼玉のキレたソードブレイカーは、伊達じゃない。千切っては投げ、千切っては投げた中学時代もそんなに昔じゃないのでわりと記憶に新しい。

「フラグ立てるから……」

「フラグも何もあるか！ どうして後ろから付いて来るだけでこうなる！ 餓鬼じゃないんだぞ！」

嘆息をこぼす野薔薇に、伏黒はキレ散らかす。地団駄しかねなかった。

「ほら、なんか考え込んでたじゃない、アイツ」

「いや、それは確かにそうだが……」

「いつもよりちよつと気にしとくべきだったかもしれないわね——電話、出ないわ。どうする？」

「……目的までは忘れてないだろ。あいつは馬鹿だけど馬鹿じゃない。それにここに来る事になったのは、アイツの因縁だ」

「まあ、そうね」

肩を竦めた野薔薇は同意してから、

「で、乗り込む？」

傍らの雑居ビルに視線を持ち上げた。階下にあるコンビニは、特に問題なく営業している。野薔薇の手元で半分ほどになったミルクティーも先程そこで購入したものだ。

しかし、上層はどうだろう。二階以上の様子はここからでは、確認が出来ない。

「……安易には踏み込めないだろ」

渋面で、傍の看板を見上げる。風俗からサラ金、最後にバー。学生には荷が重いラインナップだ

「ほんと、他の人送りなさいよ。花の女子高生をどんなところに放り込んでんのよ」

「人材不足に、言った通り、虎杖繋がりだろ。しょうがねえ」

「はー……なんか買ってくる」

それだけ言い残し、野薔薇の背中はコンビニの中に消えていった。

残された伏黒は、手元のレジ袋をがさがさ漁り、中からおにぎりを取り出した。鮭だ。むしやりと一口。

「本当に、全く」

嘔下後、一言ぼやいた。五条は何を考えているのか。伏黒の脳裏に飄々と笑うあの顔が現れる。おにぎりへ噛み付くように喰らいついて、顔ごと噛み潰す。

「空木田朱音、か」

片手のスマホをスワイプ。メールで送られてきた資料を開き、目を落とす。

名前、写真、経歴。高専所属時の使用術式——総じて、今回のような事ができる人材には見えない。

探知、感知。そういう事に特化した術は確かに有用だろう。だが、自身の性質に耐えられないのでは意味がない。伏黒は知っている。己の才能に心がついて行かずにこの世界を去った人間を幾人も知っている。

彼女も、その一人だ。高専を去る事となった理由として、彼女は自身に集まりすぎた呪いに殺されかけている。伏黒の見つめた文字は、語った。

「しかし、どうやってここまで事を——」と言い掛け「……いや、まだ決まったわけじゃない」

頭を振って、新たなおにぎりの封を切った。梅干し。おにぎりは、普通の具が一番美味いと伏黒は、思う。

鰻やいくらなどは高いだけだ。特にコンビニのものは、具も小さい。

「た、タスケてー!」

その時、コンビニ横の上層へ続く階段前のドアが勢いよく開かれた。現れたのは、女性が一人。日本人ではなさそうだ。音と声に反応して目をやった伏黒は、

「……………!?!」

思わず、息を呑んだ。

大きく腫れ上がった腹。むき出しの胸。血走った顔。なにより、化粧や素肌を上書く鮮やかな赤。



「タスケ、」

次の言葉は形にならなかつた——腹が裂けた。勢いを維持したまま女だったものは、吹き上がる鮮血を撒き散らしながら地に転がると、もう二度と動かなかつた。

伏黒の目は、もうそちらを見ていなかった。今は、じつとある一点を見つめている。

「……なるほど。〈玉犬・渾〉」

呼び出すのは、白黒混合の魔犬。影よりいでて、双眸を光らせると共に、伏黒に纏わりつくように爪牙を見せつける。その姿は、バスカビル魔犬が如く、畏怖を纏い。鋭角ティンダロスより来るものが如く、狡猾なる視線を放ち。一度、ひた走れば雷ブラックドラッグ光が如く。

伏黒の視線の先にある”それ”は、彼が眉を顰めるくらいには、

「ひつでえ見た目してんな」

伏黒の口から思わず出た感想は、端的に、”それ”を現していた。

赤子は微笑う。母の笑顔を真似るように優しげな口角と細まる瞳。産毛のような毛髪。白桃が如く柔らかで赤みのある頬。丸みを帯びた輪郭。

されど、騙されてはいけない。あれは、あまりにも優しくない。呪霊は例外なく、醜悪だ。呪いというものは、そういうもので、そうなるのは至極当然。だからこそ、伏黒の感想の重みは推し量れる。

ずるりと、母の遺骸より現れ出るのは、無数の骨が連なった蛇のようなもの。背骨が

連なり、各所を肋骨がアクセントめいて生えている。がちがちと噛み合わされている辺り、普通の使い方はしないだろう。

『マ、ママア……』

——来る。伏黒がトンファーを取り出すのと同時。

『パパアアアア!!』

「ツ!!」

赤子の口が開き、ミニチュアにした同じ呪霊——”子”と呼称しよう——が伏黒目掛け一直線——届く前に、〈玉犬〉が寸断。爪走り、即座と走り出す。3メートルと無いから一瞬で距離は詰められる。伏黒もまた、後に

続く。

迎え撃つのは、呪霊から射出される鋭い肋骨の弾幕。肋骨と肋骨の間は狭く、弾切れの様子は見えない。真正面からは危険だ。伏黒の思考は、答えを導き、印を刻べば、飛び立つ影。

〈鵜〉——怪鳥は、すんツと天を衝くように羽撃く。

多数の式神を役使し、操る稀代の式神使いである伏黒にとつては、当然の戦法。多面的な攻撃に対処できるのは呪霊に呪術師。双方ともそう居ない。

「マンマアア!!!」

しかし、呪霊は例外だった。頭部が花開く。奥から吹き出たのは、同一の姿形、”子”。脳漿を撒き散らし、化粧代わりに顔面を彩った”子”が、〈鶴〉に迫る。翼が翻り、回避。直線軌道なら容易と躲せてしまう。故に急降下は続く。

「ッ〈鶴〉!! 避けるー！」

伏黒は、思わず口走っていた。”子”が旋回。重力を背中に受け、加速。自身を躲した〈鶴〉を追尾する——伸ばすだけではなかった。

——加速／加速／回転／停止／加速／旋回。

〈鶴〉は、攻撃どころではなくなってしまった。必死に逃げ続ける〈鶴〉をそのままにして、伏黒は更に接近を試みる。

〈鶴〉から他の式神に切り替えられない。切り替えてしまえば空中に居る”子”が伏黒や〈玉犬〉にターゲットを変えるのは明白だからだ。

故に、伏黒は、〈玉犬〉の背後から飛び出す。カッとコンクリートを蹴り、呪霊の射線から逃れ、脇へ回り込む。

追尾するように、呪霊の首が曲がり、放たれる”子”。

トンファーでは無理だ——顔面への一撃をしゃがみ躲し、即座にトンファーを投げ捨てれば、流れるように、影へ指を滑り込ませ、抜刀。しやらんと鋼、心地よく刃鳴らせながら、”子”を斬り伏せると体勢低く前へ距離を詰めに掛かる。

ほぼ同時。〈玉犬〉は地を蹴った。前ではなく、上に。上から、山なりに呪霊へ飛び掛かるライン。すると、上に射線は向けざる得ない。すれば、

「こつちへの攻撃が逸れる……！」

伏黒、及び〈鶴〉への攻撃がおぎなりになる。到来する隙を見逃すわけにはいかない——伏黒の腕が閃く。投擲される刀。名刀とは言えずとも、十全と伏黒の呪力が込められた刃は驚異的だ。

これを見逃す呪霊でもない。即座と”子”等がうねって、落としにかかる。しかし、呪力の冴えがそうそうと落とすのを許さず、叩き落としの代償に、”子”らが幾本か落とされる。すると、またチャンスは生まれる。

そう、チャンスだ。

ヒュンツと風鳴りが微かに戦場を切り裂きけば、弾幕の僅かな空白を縫うように、軽やかな音と成り、呪霊に突き立つ。

「忘れられちゃあ、困るわよね」

呪霊の頭部に釘が四本——出処を、釘の軌跡を逆に辿った先には、いつもの金槌片手で不敵に笑う野薔薇。伏黒は、自然と口角を上げ、

「ナイスタイミングだ」

「あつたりまえよ！」

呪力、即座と迸り。顕現するは、芻靈呪法・簪!!

十十十

「こつち、だったよな……?」

虎杖は慣れない池袋の人混みを縫うように、持ち前の健脚を唸らせる。雑踏を走るの  
は難しい。だが、虎杖の馬鹿げた身体能力には関係がない。すいすいと駆け、あつとい  
う間に目当ての後ろ姿を見つけた。

「おーい!」

足を止めさせるため、声を掛ける。視線が寄ってくる気にせず、もう一度、呼ぶ。や  
はり反応はない。

「むーあー、なんだ? こういう場合どうすりや……えーつと、あーん……? つて  
あ、ストップ! ストップ!」

掛ける言葉が見つからずにあたふたする虎杖は、角を曲がった背中を見て、とりあえ  
ず、足の回転を上げた。見失っては元も子もない。

「うおっ! どこ見てんだ!」

「めん!」

「きゃっ！ 危ないわよ！」

「ごめんなさいっ!!」

横合いから出てきた人や前から来る人に、ぶつかりそうになりながら、目的の背中が曲がった角を虎杖も同じく曲がる。

「……………」

「うおっ!!」

と、曲がった直後にこんにちわ。

「……………なにかよう？」

小首を傾げた目当ての背中の主、少年は、虎杖に訊く。

「つと……………」

衝動的に追いかけたからどうするか迷い、

「一緒に居た女の人——朱音さんは、一緒じゃないのか？」

ええいままよと直球一言。ストレートだ。

「女の人……………あかね……………あの人、あかねって言うんだ」

すると想定外の返答で打ち返された。見事なピッチャーライナー。虎杖は目を丸くして。

「え、ああうん、そうだけど……………知らなかったん？」

「……………うん」

「まあ、そういう事もあるよな。五条先生とかそういう事よくする」

「……………五条？」また小首を傾げた少年に、「気にすんな。こつちの話」と虎杖は、話を切り上げた。

「でさ、朱音さん、どこ行ったか知らね？」

「……………知らない」

ふるふると横に首を往復させる。

「そっかー。知らないなら、しょうがないよな」

むむーどうすつかなあ……と虎杖は腕を組む。正直、勢いそのままに出てきたからには、収穫なしで帰れなかった。

ぶつちやけ、釘崎が怖い。伏黒も怖い。俺のクラスメイトが怖すぎる——虎杖はガクブルだった。

「伊地知さんに連絡しよ」

日和った。虎杖悠仁、日和った。スワイプ、タップ。ちよつと指が固まる。着信履歴——野薔薇だ。親指がタッチパネルの上で躊躇いながらも、無事伊地知を履歴から見つけ。

「——あ、伊地知さん。しもしも〜」

『はいはい。虎杖くん、どうしましたか』

「監視カメラに映ってた男の子、保護したんだけどさ。どうしよ」

『あ、本当ですか。こちらで預かりましょう。今、どちらです？』

「えつと……ここは……」

『いえ、構いません。場所を指定しますので、こちらにお願いします。lineで場所送りますから、確認してください』

「了解ー」ぽちっと通話を切つて「というわけでちよつと、一緒に——」振り向いた虎杖は、固まった。

「……………居ない」

きよろきよろ周囲を見回した後、虎杖は、泣きそうな顔で一言呟いた。



## #6

余命宣告というのは、テレビドラマだけのものではないらしい。

朱音は、医者と言葉が頭の中でリフレインさせながら、そう思った。

六月。梅雨の時候。一人っきりの小さな待合室。しとしとと中庭を打つ雨の様を、窓際に腰掛けた朱音は、ぼうつと心非ずに眺めていた。そんな彼女の頭を占める最もホットな話題は、余命半年。ホットではない。どちらかといえば、冷たい。あまりにも冷酷で無慈悲。変えられない、現実。

「案外、身近にあるもんだね」

末期の癌。ステージ4。子宮から始まり、全身に転移した癌はもうどうしようもないと、医者は朱音に言った。抗がん剤による延命が出来るかどうか。したところで、半年が一年か、未満かに伸びるくらいだと神妙な顔の医者には、おすすめされなかった。

この後、カウンセリングや諸々があるとと言う話だが。

「……帰ろ」

全く聞くにならない。わりとすぐ死ぬという宣告を受けてからそうそうに死ぬ準備に移れる人間が居るんだろうか。朱音は、その梓ではなかった。だから彼女は、ぺったんこなソファから腰を上げた。正午のくだらないバラエティが流れるテレビの前を通り過ぎて、廊下に出た。

「お帰りですか？」

「あつ……………」

タイミングが悪い。もつと早く決断すべきだった。ぼうつとし過ぎた。目の前で苦笑する看護婦に、朱音は、気まずげな微笑を浮かべた。

「構いませんよ」

「えつと……………」

言葉の意味を図ろうと朱音が思考を回す前に、人の良さげな看護婦は、言葉を作っていた。

「また気が向いた時、聞ける気分、話せる気分になったら来てください。先生方には言っておきますから」

「…………すみません。お言葉に甘えます」

「いいんですよ。お大事に」

生温い風の中に踏み出し、傘を広げる。透明な膜の向こうを雨が打つのを、何気な

く振り向くとエントランスまで先の看護婦が見送りに来てくれていた。朱音は、軽く頭を下げ、病院を後にした。

呪術高専を辞めてから、三年が経っていた。実家のある青森に戻ったものの、寺のある山に戻る気にはならず、譲って得た資金等を元手に青森市内のマンションの一室を購入していた。

「……はあ」

これからどうしよう。朱音の頭を占めるのはそれだけだった。三年はあつという間だった。気づけば季節は巡り、今日になっていて、余命の宣告を受けた。

余命宣告って当たるんだらうか。朱音は、ちよつと疑つてみる。けれど、無駄だと直ぐに悟る。

「分かんないや。あんがい、死なないかもしれないし」

雨音と時折通る車の駆動音をBGMに、とぼとぼ帰宅していると、くうくう腹が鳴る。うーん正直。朱音は、自身の腹の正直加減に少し驚いた。

ついさつき道端で倒れて病院に運ばれた上、死の宣告を受け取ったのに、食への欲求は変わらない。憂鬱の欠片も感じさせない生体反応の実直具合に、朱音は、ふつと笑みを零し、信号で立ち止まると共に道向かいに見つけた馴染み深いロゴマークに、思わず笑みを深めた。

「マック食べて帰ろっ」

五条の甘党が乗じ、マックシエイクやら目当てに連れて行かれたマックで、ジャンクフード大好き女になってしまった田舎っ娘たる朱音は、週に三度はマックに行っている。コンビニ限定スイーツやら駄菓子好きやらも五条のせいだ。

昔は毎日行っていたのだが、体重の激増の煽りを受け、控えていた。それも今日までだ。半年後に死ぬなら毎日マックを食べても問題ない。体重なんて気にしなくていいのだから。

気持ちよく食べてやろう。三角パイはチョコから月見も全部。バーガーもたっぶり。ノリノリで朱音は、マックの自動ドアを潜った。

「やあ、朱音」

——潜ろうとした時、脇から声がした。懐かしい声。そう、実に懐かしい声だ。そして、朱音としては正直、聞きたくはない声。しかし、足は止めてしまった。ああ、いや、止めなくても無駄だろう。

「……久し振りですね」

「うん、久し振り」

視線の先には、胡散臭い笑いが袈裟を纏っていた——夏油傑。現代最悪の特級呪詛師は、朱音が知っている笑みをいつも通りに湛えていた。

「夏油さん、死んだって聞いたんですけど」

「見ての通り。まだピンピンしてるよ」

両手を広げてみせる夏油は、なるほど確かにと朱音に思わせるくらいには、元気そう  
だ。朱音同様、末期患者でも見た限りは元気だったりするから、見た目とテンションほ  
ど元気でもないかもしれないが。

「それで何かようですか？ 私、お腹減ってるんですよ」

「丁度いいね、奢るよ」

「わーい、嬉しい」

「はは、棒読みだ。もつと喜んでいいんだよ」

「じゃあ、帰ってもらえますか？ お連れさんも一緒に帰ってもらえたら喜びます」

「流石だね。気づいたか」

ちよつと以外そうな夏油に、朱音は苦味渋ったように唇を歪める。

「嫌でも気づきますよ。それに、気づいただけで、私は何も出来ない。なにより、居ら  
れるとご飯が喉を通らないです。帰ってもらえますか？」

朱音が見ている方。道路脇の柵に、一人の少年が傘もささずに腰掛けていた。縫い目  
を顔面に走らせた白髪に黒を纏う姿は、雨の中、傘を刺していようがないかろうが目立  
つだろくに、誰も気にしないし目もくれない。そのまま通り過ぎていく。視線に気づい

た彼は、笑みと共にぴらぴら手を振ってきた。

「何もしないよ。付いて来たいと言ったから連れてきただけさ。ほら、入ろう」  
「……………そうですか」

逃げ場は無いらしい。溜め息を隠しもせずに落とすと打って変わってテンションを下げると朱音は、夏油の後に続いた。

十十十

「単刀直入に言うけどさ。仲間になってくれないかな？」

「余命半年なんですけど、私」

ポテトをケチャップに押し付け、朱音は口に放り込んだ。

窓際の二人がけ席で、朱音と夏油は向き合っていた。合間のテーブルの上には、前言通りに夏油が奢ったバーガーからポテトにドリンク等が並んでいる。トレイに乗せられているが窮屈そうだ。

「知ってるよ」

「……………え、なんでです？」

「暫く見てたしね」

「ストーカーとか最低じゃないですか……」

溜息を押し殺すように手元のハンバーガーに食らいつく。オーソドックス故の懐かしさ美味しさが口いっぱいに広がる。パティやパンズにピクルスを噛み砕き、喉の奥に追いやって、

「ご存知の通り、大した術式は持ち合わせていないので、役には立てないと思いますけど」

「確かにそうだね」

「喧嘩売りに来たんです……？ 買いませんけど」

思った以上に、あっさり頷かれた朱音は、軽く睨んだ。

「はは、違う違う」

軽快な笑い声を上げる夏油は、親しみやすさを滲ませた笑みで語りだす。

「昔は確かに取るに足らなかつた。けど今は違う。死を自覚した今、君の術式は変貌を遂げている」

「はあ……」

変貌—————————————————————————————————————  
変貌————————————————————————————————————

「何よりの証拠が真人を感じできたことさ」

「……ああ、さっきの」思い至り、「呪霊ですよね。ついに人以外と組んだんですね。五

条さんは、そんなに強敵ですか」

「煽りが下手くそだね。とつくの昔にあいつのことは承知してる。まあ確かに、」

一瞬、叩きつけられた冷気に朱音は、動揺をどうにか内心に隠した。

「現状、組まなきや勝ち目も見えないってのは尺だよ。私だって、プライドを捨てた覚えは無い」

「……怒って帰ってくれば助かったんですけど」

「私、そんなに怒りっぽかったかな」

「怒れなかったからこうなってるんでしょ」

「違う。そういう君は思いの丈一つぶつけられなかったね」

悪い笑顔で、ぴしりと指を突きつけた。すると、朱音は苦々しく口を歪め。

「……性格悪いですよ」

「心外だ」

片眉上げた夏油は、肩を竦めた。

「面の皮が厚い……。それで私の術式はどうなってるんです？ その呪霊と何の関

係が？」

「母子感染術式、聞き覚えは？」

「不躰ですね。知りません。それが私の？」



「YES。名は体を表すとはまさにこれだ。この術式は、君の母親から君に感染している。そもそも術式の継承は、ムラがある」

「流れた涙は数知れず。酷い世界ですよ。天性の才が全てを決める」

「能力がないのは、呪いに愛されなかったからだ。当然だと私は思うね」

「そういうところ、ほんとに相変わらずですね。酷い選民思想」

「変わらないのが美德なのさ——話を戻そう。君は、受け継いだわけではなく、感染した。これに関しては100%だ。ムラはない。確実に次代に感染する」

「それがどうして今更？」

嫌な予感がした——朱音の呪力感知は、非常に高い。通常感覚に加え、存在する知覚機構は、第六感と言ってもいい。

「簡単さ。自身の死への認知をトリガーに、この術式は起動する。時限式で自動的。そういうものなんだよ」

手元の水で、夏油は唇を湿らせ、

「かつて、御三家に一人の呪術師がいた。非常に優秀だったが、好奇心が旺盛でね。何もかも試さずには居られなかった——加茂憲倫、知ってるね？」

「……嘘でしょう？」

現代呪術史において、この名は、悪名高い。呪術より離れて暫くしている朱音も忘れ

てはいなかった。

「君の母親は、この男の作った術式にどこかで罹患し、君に感染した」

「どういう、術式なんです？」

朱音は、乾き切った口を無理矢理動かす。腹の中身をぶちまけてしまいそうなまでに胃は捻れていた。出た声は、あからさまに震えていた。

「君の母親は、君を孕んでいた。だから、何ともならなかったが、君はどうだ。もう、子を作る事はできないだろうか？」

そうすると、残された術式は、術式を通し、子宮に溜まった呪いは、どこにいくのだからうね」

「どこへ、って……」

「加茂憲倫は、件の研究の結果として、呪胎九相図という特級呪物を得ている。

そう、結果だ。君の術式は、その副産物にあたり、君の呪力感知の高さ、呪媒体質もまた術式の一端だよ。

なら、結果とは？ 君に感染した術式は、果てに何を生む？」

「……………呪胎——受胎……………まさか、私は今」

青を通り越し、朱音の顔は白く染まった。

「そう、呪霊を孕んでいる——しかも、とびつきりのものを」

おどけていうものだから一瞬、朱音は、嘘を疑った。しかし、そんな荒唐無稽な嘘をわざわざ吐くだろうか。

「……私が、何をしたっていうんです」

嘘ではないのを理解してから暫く後に、朱音は呟いた。それは、あまりにも信じ難い現実に押し潰される寸前の声だった。

「さあ？　交通事故に会うようなものさ。君の死がそういう形だったただけでね」

「そんな、な……」

言葉に詰まる朱音の脳裏に父の死に顔が過ぎる。彼女の父は運が良かったのだ。普通に死んで、家族に看取られるのは、恵まれたことだ。呪い蔓延る現代において、人の形で死ねるのは、とても幸せなことだろう。

「それで、どうする。君も母親と同じように首を吊るか？」

まあ、それも選択の一つだ。もともと、簡単に死ねるかどうかは保証しないがね」

この夏油からして、とびつきりと言わしめた呪霊が簡単に楽にしてくれるとは、朱音自身も思わない。もう彼女は、死を選ぶことすら許されていない。まともな死は望めない。

なにより、彼女は呪霊を恐れに耐えきれず、呪術高専を去った。今、彼女の中に膨れ上がる恐怖は、他者の想像を絶する。

「私に、何をさせたいんですか」

本題に、朱音は震える声で切り込んだ。活路を見出すために。

「敏い子は、嫌いじゃないよ」

それを待つていたとばかりに、夏油は、口端を持ち上げ、三日月を作った。まるで、悪魔のような——朱音は、その笑みを生涯忘れられそうになかった。

「君には、呪詛師をやってもらいたいんだ」

## #7

『期限は、半年後。10月31日。それまで、東京で呪詛師をやって欲しい——不安かい？ 大丈夫。私の術式は知っているだろう。君にレクチャーするくらい造作もないさ。』

終われば君を死の運命から開放する。必ずだ。約束するよ』  
などと夏油は、言っていたが、あの男、自身に信頼する余地が残っていると思っ  
てるのだろうか。

夏油に会った時点で、朱音は詰みだった。死んだと世間で認知されてる男が生き  
てるのを知ってしまったのだ。呑まなければあの場で死んでいる。

悪辣極まりない。八方塞がり。戻れず、進むしかなく。どちらにせよ、朱音には、明  
確な死が待っている。分かっていた。だけど、人を呪い、殺し、余命近くながら生き恥  
を晒している。

……ランナーズハイに浸るには、あまりにも、朱音は正気過ぎた。

「思い通りに、なつてたまるか……!」

痛む腹を抱えながら、朱音は走っていた。息は荒く、顔色も悪い。足取りも覚束ない。術式の把握により、自身の時間切れを把握した。このまま、夏油の思惑通りに、これを産み落とすのは癪だ。

何よりも、あの子を一人のままにしておきたくない。一人は辛い。父を亡くし、天涯孤独となった朱音は、彼に自身を重ね、執着していた。

だからこうして、朱音は、足を止めない。

さて、時刻は昼を過ぎ、夕暮れに近づいていた。空はほんのり茜を帯び、ビルの際に日は沈んでいく頃。横顔を薄い朱に染め、朱音は先を急ぐ。大通りに比べて人数は疎らだ。特に今の時間の大通りは人で溢れかえっている。体力に自身のない朱音が急ぐなら自然とこちらを選ぶ事になった。

集合場所、及び時刻は、あらかじめ決めていて、向かうだけだった。

「いらつしやいませ〜」

小さな喫茶、人数は疎らだ。視線を走らせ——朱音は思わず、固まった。

「うっす」

待ち人は居らず、居るはずのない人——虎杖悠仁の姿があった。

「……なるほど、そうなるのね」 呟き、「偶然だね」 虎杖の前に腰掛け、微笑う。

「偶然じゃないよ。あの子を追いかけたらここについた」

あの子——あの少年だ。虎杖は、一度見失ったもののすぐに追いつき、ここに入る彼を捕まえた。結果、聞き出せたのはここが待ち合わせであること。もうすぐ、彼女がここに来るということ。

それを知って、虎杖は待っていた。

「あの子は？ 居ないみたいだけど」

「保護してもらった。こつからは多分、危ないし」

「そっか……。すみません。コーヒーをホットで一つ、お願いします」

「残念そうっすね。あ、俺はメロンサワーフロートおかわりで」

「まあね。やりたい事が成し遂げられなかった訳だから。悔しいよ」

遠のく店員の背中から視界を外し、朱音は苦く微笑う。

「あの子の家族、見つかったよ。探してたんדר？」

「つ……そっか。良かった。あーでも残念。私が見つける筈だったんだけど……どこに居たの？」

「バーの中、見てなかったよな」

呪霊の対処に完了した伏黒と野薔薇は、雑居ビルの上層に乗り込んでいた。まだ呪霊がいれば危険だ。だが、そこで見たのは無数の呪殺体だった。ソープからサラ金、バー。

例外なく死骸が転がっていた。

だが、最上階のバー。そこに唯一の生存者が居た。

それが、件の少年の両親だ。

「抜かった……抜かったなあ……」あちやあと天井を仰ぎ「でも、ありがとう」

「お待たせしました。ホットコーヒーとメロンソーダです」

給仕されたコーヒーを受け取り、会釈と感謝を伝えた朱音は、唇を湿らせるとマグカップを見つめ、言葉が続ける。

「私じゃなくても良かったんだ。ただ、見ていられなかった。家族が居なくなるのは悲しいものね」

「……そうっすね。確かに」

「君も?」

「うちは元々親が居なくて、代わりに爺ちゃんが育ててくれたんだ。爺ちゃんも地元で、仙台で寝てる」

「同じね。私も両親は居なくて、拾ってくれた人が家族になってくれた。君も地元北だったんだね。私は青森。私の父も青森で眠ってる。最後に会いに行ったのは、何時だったかな……」

「……会いに行こうよ、朱音さん。青森なんて、すぐじゃん」



「無理よ」

焦茶の湖面に視線を落としたまま、朱音は首を振る。

「どんな顔で会えばいいのよ。こんなにも呪って、呪って、呪いをばら撒いて。」

私はね。呪術高専に入ったのは父が紹介してくれたからなの。自分に向き合えるように、自分と戦えるように。いつか呪いを乗り越えられるように。生まれがどれだけ呪われていても」

なのに——絞り出したような声だった。

「私は、このざまよ。笑えるでしょう？　滑稽でしょう？」

何かを堪えるように息を吐き、

「ほんと、私って馬鹿ね」

「笑えるかよッ……!!」

がたつとテーブルを揺らして、勢いよく立ち上がった虎杖は、怒りと悲しみに顔を歪ませていた。

「笑って、たまるか……!!」

「虎杖くん、座って」

「あんたは……!!」

「虎杖くん」困ったように眉をハの字にして「みんな、見てるから」

「……あつ」

周囲の視線に、虎杖は言われて気づくと申し訳なさげに周囲へ頭を下げた。

「立ち次いでに、外へ出ようか。目立つちゃうし」伝票片手に席を立ち「ここは奢ったげる」

出会ったあの時と同じ微笑みを湛えた彼女を、虎杖は見た。

そして、どこか苦痛が滲んでいるのを見取った——何かの起こる。虎杖は、大きな何かが蠢いて、胎動するような感覚を彼女に見た。

「くそっ……」

吐き捨てるように呟いて、虎杖は彼女の後に続く——嫌な予感がした。

十十十

「お、出てきたわよ」

「様子はどうかだ」

件の喫茶近くのビル屋上に野薔薇と伏黒は居た。指についた米粒を舐め取った伏黒は、縁に腰掛け、双眼鏡で二人の監視をしている野薔薇に訊いた。

「ん、まあ和気藹々な方。今すぐ呪り合う感じではないわね」

「そうか」

短く答え、ペットボトルのキャップを捻り、傾ける。緑茶が爽やかに伏黒の口を通って腹に落ちた。

「命令って、今どうなってるの」

「追跡してる対象が呪詛師であるのは確定した。なら、捕縛。もしくは……」

「排除、ね」

「……そうなる」

空気は重い。排除、そう、排除。明確な殺害指令。重くならないわけがなかった。呪霊を祓うのとは訳が違う。人殺しであろうと相手は人だ。呪殺。その言葉は、二人に重くのしかかる。

ただ、相手が呪詛師然とした悪人のものならよかった。だが、そうには見えない。どちらかと言えば、被害者。何か大きなものに振り回されている。

「あんまり気持ちがいい展開になりそうにないわね」

ずっと紙パックからカフェオレを啜った野薔薇は、素直な感想を零した。

「いずれやる時は来る。それが早いか遅いかだ。

俺達は、正義の味方じゃない。呪術師だ。呪いに呪いを返すしかできない」

「……分かってるわよ」

双眼鏡から伏黒に視線を向けた野薔薇は、少し口を尖らせていた。それから、すぐに双眼鏡を覗き込み、

「分かっている。当たり前だよ。当たり前じゃない。呪術師をやっていたらいつかやることになる。分かっていたわよ。後悔だけはしないで決めてたんだから」

自身に言い聞かせるように、何度か呟いた。

「――〈鵜〉」

彼女の傍らで、伏黒は、式神を呼び出す。デスマスクの怪鳥が影より勢いよく現れた。「あの二人を追え。出来るだけ上空から見ろ。手は出すな。いけるな?」

こくりと頷く〈鵜〉の頭を伏黒がくしゃりと撫でて、軽く押せば一気に屋上の縁から飛び出し、急上昇。猛スピードで駆け抜けていく。監視の意味もあるがいざという時は、先制しなければならぬ。伏黒が〈鵜〉を選んだのは、その意図有りきだ。

最も自由度の高い空中戦。対敵の術式に用いられる呪霊の種類は一種類であり、人を通さなければ現れないであろう仮説を元にした選択だった。

コンビ二前の戦闘。マンションやビルの死体。それらを総合した結論として、伏黒はこれを提示した。

「……からだど、そろそろ厳しいわね」

双眼鏡から目を離し、野薔薇が振り返る。

「降りて追うぞ」

「当然」

決まるが早し、二人は、早々に屋上を後にした。

「ねえ、丸く収まると思う?」

「……さあ、どうだろうな」

屋上から出て、階段を先に降りる野薔薇に訊かれた伏黒は、少しの沈黙を置き、そう答えた。

十十

「この辺でいいかな」

喫茶より、徒歩数分。四方をビルに囲まれた都心の空白地帯的な空き地に虎杖と朱音の姿はあった。

空き地。都心にも色々あるが、ここは群を抜いて人の気配がない。なにせ通りを普通に歩いていては、まず気づかない。路地の入り口から見た限りは行き止まりで、奥まで進めばようやく直角の曲がり角があるのに気づく。周囲のビルに人の気配は何えず、倉庫もしくは、完全な空っぽで、この空き地の入り口に立っていた看板にあった施工開始

の日付は、数年以上前のもの。何かしらの理由で、宙ぶらりんになったのだろう。

日々が風化させた看板から、何を作ろうとしていたのかは読み取れない。しかし、中々に広く、中央を開けるようにして多数放置された建材や機材から、それ相応の建築物が作られようとしていたのは伺えた。

誰もが忘れ去った、もしくは、誰かが忘れようとしている土地、そう見えた。

「……何をやる気だよ」

同時に、虎杖は嫌な淀みを感じていた。何かがここにある。息苦しさや粘つく空気。ちらりと周囲を伺おうとしたが、

「虎杖くん、帳張れるかな。私、そっちの才能無かったんだよね」

返事に気を取られた——即座に臨戦態勢。いやもう、スタートダッシュを切り掛けている。

「っ……………」

「ああ、私は戦う気とかないから。安心して。多分、これから必要なんだ」  
そう付け加え、

「虎杖くんが無理ならそうだな。そこで見ているお友達ならできるかな」

朱音の視線が上を向いた。——バレている、冷や汗が虎杖の背中を伝う。

「二応、呪力感知が売りだったんだよ。これくらい出来ないとね」

朱音は、肩を竦めて。

「さて、本題ね。私の術式は——待って、これも違うから。ほんと呪術師ってややっこしい」

嘆息一つ。術式の開示とは、呪術戦において、非常に大きな意味合いを持つ。手の内を明かすことで、呪力の飛躍的向上等のアドバンテージを等価交換として受け取れる——のだが、言葉通りのつもりではないのだろう。彼女は、そのつもりではないらしい。

「呪孕<sup>ノロイハラム</sup>。私の子宮に溜め込まれた呪いを呪霊に変換し、呪殺対象の臓器を元に子宮を形成後、受胎、出産のプロセスで殺害する呪殺術式。

プロセスの通り、人にしか効果が無いんだ」

人を殺す事だけの術式——虎杖は、あまりの悪辣さに戦慄を覚えた。

「そして、これは一側面ではない。生み出された呪霊は、必ず私に戻ってくる。戻ってきた呪霊は、子宮の中で統合される。

つまりね、私の中には、今までの私の人生でずっと溜め込まれ続けた呪いが一つになつて、生まれ落ちるのを待っているんだ」

「何が——」

「虎杖くん、おねがいがあるんだ」

言いたいんだよ——虎杖の言葉を遮った朱音は、諦めを浮かべ、助けを乞うように

言った。

「私を殺してもらえる？」

十十十

雑踏で一人、立ち止まり、

「はは、言ったか」

ある方向に視線を向け、夏油傑は、小さくほくそ笑んだ。

十十十

夏油は、呪霊を一つ、朱音の中に潜り込ませていた。

朱音は、他者の呪力には敏感だが、自身の中に対しては、鈍感だ。自身の中で膨れ上がる呪力、呪霊の塊が彼女自身への呪力感知を曖昧にしていた。

だからこそ、夏油は、そんな芸当が出来たのだ。

ただの呪霊ではない。夏油の手でカスタマイズされた呪霊は、ある種の起爆剤だ。設定された条件によって、起動するようになっていた。



勿論、これらすべて、夏油から朱音には、伝えられていない。

・条件1：術式の開示。

・条件2：呪力の過剰な上昇。

・条件3：選択式のキーワード

1つ、「助けて」

2つ、「許して」

3つ、「殺して」

以上の条件がたった今、達成された。

++++

内側から裂け、中から現れるものに耐えられず、朱音は断末魔一つ無く碎け散った。

++++

10月XX日 15時34分25秒

東京都豊島区池袋

十十十

虎杖は、眼前で消えゆく命に手を伸ばす事しかできず、朱音より吹き出、荒れ狂う呪力に弾き飛ばされた。

十十十

「結局のところ、呪術師は起きたことにしか対応できない。悲劇を防ぎきって、何もかもを守るなんて出来ないんだ。

もちろん、悟にもね」

夏油は、雑踏に紛れ、小さく嗤う。

「さようなら、朱音。わりと役に立ったよ、君は」

彼の後ろ姿は、あつという間に人の海に消えていった。

十十十

「嘘でしょ……?!」

「術式の開示と生贄による呪力上昇か……!」

黒色の帳は、虚空に現出し、内側を隠していく。それに飛び込んだ伏黒と野薔薇は、形をとった呪いの姿を見上げ、驚愕を零す。

「それだけじゃないみたいよ」野薔薇が指す方を見た伏黒は、「偶然にしては出来すぎているッ……!!」

歯噛みして唸った——崩れ落ちた廃材や泥に塗れた崩れかけの社。中身は無い。いや、周囲に散らばっている紙切れをよく見れば、何やら文字や文様が見える。伏黒は、確信した。あの社は、何かを封印していた。宿儺の指程でなくとも、封印する価値があるほどのものを収めていたのだ。ここが空き地のまま世間から取り残された原因であるのは間違いないだろう。

そうやって、偶然と必然。あらゆるものが重なった結果——いいや、違う。呪いは惹かれ合う。呪いが呪いを呼ぶ。呪いと呪いは共鳴する。

故に、“それ”は現れた。

「っ……でけえな……」

砂と傷に塗れた虎杖は、激突で生まれたピルの瓦礫を押しつけ、這い出ると“それ”を見上げた。

空洞に青白く炎を揺らし、”それ”は、耳まで裂けた口を開けて閉じて、お歯黒を塗りたくった歯をかつかつ打ち鳴らす。

『ヒビ、ママ、パパ、ママ、パパ、ママ、パパ、ママ、パパ、ママ、パパ、ママ、パパ、ママ、パパ、ママ、パパ、ママ、パパ、ヒビヒビ』

白色は、高く啜う。言葉の端々に愉悦を滲ませ、”それ”は、頭上より彼らを嘲笑っていた。

十十十

——特級仮想怨霊〈がしや髑髏〉顕現。

## # 8

『キャハハハヒヒヒハハハハハヒヒヒハハイヒアヒハヒハイハイハイキキキキハハアア!!』

無茶苦茶で出鱈目な、音飛びのして壊れた音声ファイルの様な噛い声。カクカクカタカタと全身を小刻みに震わせ、狂気を思うがままに発露する白黒伽藍の髑髏は、体長六メートル。左右三本ずつの腕を持ち、青き炎を衣が如く揺らめかせ、纏っている。足はなく、空中に体を浮かべていた。

そして、その噛い声は、

「うおっ!」

ゴウツ! 物理的な効力を伴い吹き荒れれば、砂埃を巻き上げ、コンクリートの破片を木の葉のように吹き散らす。

呪力を纏い、ガードに専念すれば大したものではない。

だが、へがしや髑髏にとつて、これは攻撃行動ですらない。腕の薙ぎ払いが、砂利に

視界を奪われた虎杖達に襲い来る。

位置関係は、リセットされており、虎杖達全員がこの空き地に唯一通じている路地の手前だ。だから、〈がしや髑髏〉の薙ぎ払いもそこ目掛け放たれた。

上半身のみの方の左右で扇状に広がる腕、一番下の腕は、周囲のビルを削り取り、建築資材を破壊しながら、右と左の順序で迫る。

「釘崎っ！」——反応が最も早かったのは、やはり虎杖。横合いから野薔薇の胸を抱え、薙ぎ払いを跳躍にて回避する。

「っ——！」

伏黒といえば、薙ぐ腕の隙間をスライディング。回避の最中、影に指を入れ、トンファーを取り出す。相手に削ぐ肉がない事からの選択だった。

正面右を躲し、次に左から来る——だけではない。

「きゃっっ！」

悲鳴を上げたのは野薔薇だ。命中したわけではない。虎杖が投げたから悲鳴を上げた。

何してくれてんだこやつ——などと思った一瞬後。

落ちる野薔薇の目の前、数センチ先で虎杖が後方に、それこそ猛烈な速度で拭き飛んだ。右ストレート。真っ直ぐな一撃が虎杖を再び、ビル壁面に叩きつける。

虎杖——！ という叫びを嘯み潰し、受け身の後、振り返ろうとする首を押しえつけた野薔薇は、駆け出す。次いで、取り出した愛用の金槌で、

「おらっ！」

悲鳴と打つて変わった気合一声。共に放たれるのは釘が数本。呪力を纏って、空を突き進む先端は、〈がしや髑髏〉を睨んでいる。

「チツ……！」——野薔薇から思わず舌打ちが漏れた。

突き刺さる寸前か、いやそれより前か。〈がしや髑髏〉の纏う炎に、釘は纏めて打ち払われていた。

「野薔薇、下がれ！」

呼ばれるか呼ばれないかのタイミングで、野薔薇が退避して。

「〈満象〉ッ！」

現出するのは、一体の像。伏黒よりも遥かに巨大で、全身に黒い文様を走らせている。出現と同時に、もたげた鼻が根から一気に膨れ上がって、吹き出るのは鉄砲水。猛烈な叩きつけが〈がしや髑髏〉に襲いかかる。

炎を打ち消し、野薔薇の芻霊呪法や自身の〈蝦蟇〉で翻弄。接近が安易になったところ、虎杖に止めを。

伏黒は、威圧を纏う巨軀を前にしても冷静だった。

「ッ!!」——だが、伏黒は、驚愕と共に下がるしかなく、無造作な左の叩きつけ。虫を潰すような平手が風を切り、降ってきた。皮一枚で躲す。しかし、ラツシユが来る。なにせ、腕が合計六本だ。今の叩きつけの他に使える腕は、五本ある。

式神を呼ぶ暇はない。伏黒の脳裏に、死が影を差す。

軽やかな刺突が三度、連なつた——〈簪〉。点に集約する呪力が炸裂。左の下の腕に亀裂を刻んだ。が、まだ動く。伏黒を押し潰すには十分だ。

いや、だった。

横から飛び蹴りが突き刺さる。虎杖だ。人間とは思えない加速で、懐に飛び込んだ虎杖は、〈簪〉の作つた亀裂に痛烈な一撃を叩き込んでいた。それで、ようやく、一つ落ちた。巨大であるが故、長大な腕が砂ぼりをたてて、転がった。

「助かった」

「おうよ」

「折る気でやったんだけど……! 馬鹿みたい硬いじゃない!!」

後ろに下がって、〈がしや髑髏〉の射程範囲から逃れた伏黒。同じく離脱した虎杖。そして、ぐぬぬと悔しげに唸る野薔薇。三人が集結する。

「どうすつよ」



「——虎杖、お前」

「大丈夫。いける」

虎杖は、痛みにもまた壊れた様に叫ぶへがしや髑髏から、伏黒に視線を向け、

「もう、やるしかないってのは、分かっているし、理解してる。それに」

強い決意を瞳に宿し、

「あの人は、助けて欲しかったんだ。だけど、俺は何もできなかった」

「それは……」

あの状況で何かが出来たとは思えない。だが、伏黒は、言っても無意味なものも理解してしまおう。

「だから、せめて……」

言葉は続かず、虎杖の握った拳の隙間から赤く一滴、零れた。

「赦いましょう」野薔薇が言葉を継ぎ、「私達には、それしかできないでしょ」

「ああ……!!」

虎杖は、首肯。伏黒は、無言で構え。

「んで、どうする」

「さっきのを繰り返したいとこだが——」

彼らの視線の先では、先よりも更に獰猛な炎を身に纏うへがしや髑髏の姿。

「正直、〈満象〉は呪力の消費が激しい。その上、あちらも火力を増しているし、学習もしているだろう。同じ手は、そう通らないと思っただ方がいい」

「伏黒の領域展開は？」

「相性が微妙だ。やつの炎が物理的な効力だけなのかが判然としない上、攻撃の通りが悪い。野薔薇とお前でようやく腕一本だ。

なにより、〈満象〉よりも呪力の消費がきつい。使えばガス欠くらいに思ってくれ」

「そうすると、別の方法が必要ね」

むむつと野薔薇は、考え込み、ちらりと周囲を見渡す。

「あまり時間は掛けられない。伊地知さんに応援はかけてもらってるが、呪霊は時間を置けば置くほど悪質化する。

特に、あれは特級分類に相当するだろう。呪い方を理解する前に祓うべきだ」

言ったそばから、三人の視線の先で、へがしや髑髏の炎は、さらなる勢いを得ると、同時に腕が再生。落ちた腕は、燃え尽きた——反転術式だ。

かちりかちりと動作を確認すると、へがしや髑髏は、三人に、にたりと笑ってみせた。伏黒の言葉通りに現状は運んでいるらしい。

どうする。伏黒と虎杖が思考を巡らせた時、ぱちんと指を鳴らした——男二人ではない。

「ティンつと来た」

野薔薇は、口端を歪め、そう言った

十十十

子守唄を聴いていた。際限無くリピートされる懐かしき調べは、沁みた。

軒先を優しく打つ雨音をアクセントに、低くしゃがれた、穏やかな唄は続く。壊れたカセットテープめいて明瞭に欠けた声だった。けれど滲む古き趣きは、むしろ、懐かしさを助長した。縁側で唄う誰かの膝を枕にして、彼女は幼き頃に夢現で浸っていた。

彼女、〈がしや鬮髑〉であり、空木田朱音と呼ばれた人間の残骸は、静かなる終焉を待ち、ただ懐古を夢に見る。

終わりはこの外、すぐ側にあつた。雨粒を物ともせず、怨念の炎は猛っていた。轟々とあらゆるものを焼き払う。小さな思い出も大きな思い出も。嬉しさも悲しさも。日々と街と人々と。あらゆる普通とあらゆる異常が絡まり、生まれた呪詛は、朱音の体にわたかまり、申し子に等しいものを形作つた。

ここは終の箱庭。〈がしや鬮髑〉という呪霊の片隅に、存在を許された小さな揺りかご。

一人の女が帰る場所。

——なあ、朱音。

ふっと、歌が止んだ。代わりに、しゃがれた声は朱音を呼ぶ。

「……唄って」

沈黙の合間を雨音が響いて、ようやく聞こえたのは、せがむ声。父に唄を望む少女の  
声。

——これでいいのか？

「……唄ってよ」

——これでいいと思っているのか？

「……お願いだから」

——私は、お前の意思が聞きたい。

これは、幻想に等しい。朱音の父は、とうの昔にこの世にいない。いわば、夢なのだ。朱音の記憶を元に作られた、ただの。ただの夢のはず。問も答も無意味。

なにより、ここもすぐに燃え尽きる。怨嗟の坩堝と化したへがしや鬪體がこの空白を知覚すれば、いいや、知覚よりも早く塗り潰す。炎とはそういうものだ。

何よりも、朱音は死んでいる。肉体は四散し、集めて繋ぐなど以ての外。  
だから、

「……唄って」

朱音の答えはそれだけ。

——それでいいのか？

なのに、あくまで優しく声は問う。

「……………」

だから朱音は、黙り込んだ。炎は近い——うねる熱波の唸り声に、炎が確実に迫っているのを彼女は感じていた。

十十

炎の嵐。爆裂的に、流星群が如く降り注ぐ拳撃は、見るだけで勝機を望む意思すら奪い去られるだろう。

これを真つ向から受け止められる呪術師は少ないはずだ。

近接に力を入れる呪術師自体は、多い。人と人、呪術師は、呪霊以外にも呪詛師と戦うこともある。人を殴り、蹴り、壊す術を知っていることは、圧倒的アドバンテージだ。

一級呪術師・東堂葵は、人は皆、全身全霊で世界に存在しているのだと云う。

ならば、肉体という世界への接触点を蔑ろにしていいはずが無い。

健全な精神は健全な肉体に宿る——改あらため健全な呪力は健全な肉体は宿る。

その証左として、五条悟、夏油傑、東堂葵、乙骨憂太 e t c ……強力な呪術師は、精密な呪力操作と同様に肉体を精密に操る。

呪霊にそれが通じるか？ 通じる場合もある。呪霊の中でも人同様に、二足で立ち、二手で戦う人型のタイプは、基本的に強い。現状、特級分類に指定された呪霊は、人とおぼ同じ形状を取った。さらに、一部特級呪霊は、我らこそが真なる人だと、次世代を担うものだと主張するほどだ。呪いは、人から生ずる。ならば人型とは間違いなく、先祖返りの一つだろう。

——彼らがどう感じるかは、さておき。

して、〈がしや髑髏〉はどうか。

完璧な人型とは言い難い。だが、足はなくとも腕がある。六本の強固な巨腕は、炎を纏い、不規則に振りかざされる。地を砕き、空を震わせる人の武威の範疇を逸脱した暴力装置。強力だ。

この場合、近接よりも呪術に頼るほうが正しい。前に出るのは、自殺行為だ。

だが虎杖にできるのは、それしかない。そして、この拳撃を受け止められるのも彼だけだ。

『マンマアアアア!!』

六腕が幼児の痲癩めいて、叩きつけ！<sup>スタンプ</sup> 叩きつけ！<sup>スタンプ</sup> 叩きつけ！<sup>スタンプ</sup> 叩きつけ！<sup>スタンプ</sup> 先程から変わらず、虎杖の回避、回避、回避。躲しきつても、衝撃波に炎が乗り、熱波が虎杖の肌を撫でた。

『ママア！ パツッパ！ パンパアア!! マアアアアアアツツ!!』

ヘイトは、主に虎杖へ向けられていた。相手は生まれたての赤子同然のようで、目の前でちよこまかするものに惹かれるらしい。

なにより、最初に仕掛けたのが虎杖だからとも言える。

「ごんのオツ!!」

躲しの次いで、蹴りを飛ばす。みしりと嫌な音がして、へがしや髑髏の腕に亀裂が入る。だが再生は早く。瞬き以下で亀裂は消え失せた。それを見るか見ないかの内、虎杖は、蹴りの反動でへがしや髑髏の射程から逃れた。

「はあ?!」

逃れたかと思えたところ、腕が飛んできた。風切りと同時に、眼前へ手刀に整えた指先が到達する。

まずい。虎杖の脳裏に言葉が過った——ところ、影が横から虎杖を連れ去った。影ではない、へがしや髑髏だ。虎杖のフードを啜え、高速で離脱する。

「……まじかよ」

脅威から離れた虎杖は、攻撃の正体を理解した。〈がしや髑髏〉は、自身の腕を引き千切って、投げつけていたのだ。目標を失った腕はビル壁面深くに突き刺さった。するとまた燃え尽き、〈がしや髑髏〉の腕が新たに生える。

「野薔薇は？」

「準備中だ。もう少し、こっちに向けさせる」

「へい、りよーかい」

〈鶴〉から離れ、靴裏を滑らせながら虎杖は着地して、伏黒に訊けばそう返ってきたから。

「じゃあ、もういっちょよか」

「ああ——〈玉犬・渾〉」

頭上の〈鶴〉が消えた代わりに、〈玉犬〉が伏黒の隣に現れる。

虎杖は、気合を込め、パンつと掌を拳で鳴らした。無理にでも込めておかないと気が抜けてしまいそうだった。短くも凝縮された戦闘時間は、彼に極限状態を強いていた。辛はずだ。キツイはずだ。だが、虎杖は止まらない。誰も殺させてなるものか。彼女を開放する。虎杖は、その一念だった。

『——準備、出来たわよ』

伏黒の胸元から声が出た。スピーカーにしたスマホだ。どうも準備とやらが終わっ



たらしい。

「今すぐいけるか？」

『当たり前。ていうか、これしくつたら私もガス欠だかんね』

言外に、ミスは許さないと野薔薇は言う。当然だ。伏黒は内心で呟く。

「つたりめーだつっの」にかつと笑って、「いこうぜ。伏黒、野薔薇」全員の背中を押す様に、前へ出た。

「何あんたが仕切ってるのよ」——半笑いで野薔薇は抗議する。

「たく……」——口元をふつと緩めた伏黒は、虎杖に続き前へ。

「作戦は、頭に入れているな」

「分かってるよ。俺は前を見てればいいんだな？」

「ああ、一直線で良い。お前は、ただ、呪霊を見てろ」

「おう」

こちらに目もくれず、自身の言葉に従う虎杖を見て、伏黒は頷くとスピーカーの向この野薔薇に、

「始めるぞ」

そう告げた。



〈がしや髑髏〉は、自身に真つ直ぐ駆け寄る虎杖を見ていた。見ているだけではない。一番下の腕を振り上げる。指先が地面を削り、勢いよく前方に巻き上げた。泥と砂、砂利から岩、果てに金属塊からなる建材。それらは、速度と熱を帯びて、射線上の虎杖に襲いかかった。

「ううおおおおおおお!!」

障害物が限りなく少ない以上、虎杖は、躲すしか無い。巻き込まれ、斃れる事になれば、作戦は全て台無しになる。だから、虎杖は、躲すしか無い。それしか道はない。

石礫を弾く。鉄材を蹴る。大きな岩を避けて飛ぶ。着地と同時に駆け、薙ぐように飛んできた鉄柱をスライディング。躲しきれない細かな砂利や鉄片が虎杖を痛めつけ、切り裂く。だが、虎杖は止まらない。まっすぐに突き進む。

与えられた役目を全うするのだと、今これが出るのは自分だけで止まるわけにはいかない。そう思うから、虎杖の足取りに緩みはない。

陸の津波を抜けた先、虎杖の視界が暗くなった。ビルに囲まれている以上、そもそもこの空き地は、薄暗い。それがさらに、暗く染まる。視線を持ち上げると自然と答えは現れた。真ん中の二腕、覆い被さるような振り下ろしがくる。

面の攻撃。先よりもずっと躲しにくい攻撃をへがしや髑髏は、選択した。

やばい——そう思いつつも、虎杖は、足を止めていない。進み続けている。呪力を十全と扱う虎杖の身体能力は、人外的だ。呪力なしで彼は、五十メートルを三秒で駆け抜ける。

だが、事前の津波が足を鈍らせた。地面をめくりあげ、叩き込まれた一撃は、実に戦略的だった。

にたりと口端を持ち上げ、伽藍の眼底に揺らす炎を瞳が如く下げ、へがしや髑髏は醜悪に嗤う。ちっぽけな人の抵抗を叩き潰さんとせせら笑う。

勝機など無い——へがしや髑髏は、言葉無く語る。

直後、衝撃を受け、派手な砂埃が舞い上がった。

会心の笑みを浮かべたへがしや髑髏は、すぐに笑みを引つ込めた。手応えがない。持ち上げたそこに死体はない。

どこだ。へがしや髑髏の首が左右を振り、空いた腕が適当に薙ぎ払う。指や掌、腕。浚うのは泥に砂。肉の生々しさには辿り着かない。

どこだ……!! どこに……!!  
 繰り返す。〈がしや髑髏〉の苛立ちは昂り、怒りに炎が強く強く瞬いた。暗がりの篝火が如く。

「——今だ」

伏黒が呟いた直後、そこから少し離れた、また別の場所——空き地を囲うビルの一つの屋上にて。

鋭い呼気と共に「——芻霊呪法」野薔薇愛用の金槌は、痛烈に振り下ろされた。

弧を描く一撃は、振り下ろした先、釘に打ち込まれる。すると他多数設置された釘にも呪力は迸り、勢いよく流れ込む。その先に満たされた流体へ呪力が纏わりついた。

〈がしや髑髏〉は、”何か”に気づく。同時に、呪力が自身の周りを這うように走っているのも感じ取った。

”何か”が起ころうとしている。しかし、それは”何か”——〈がしや髑髏〉自身、そこまで考えることは出来た。

しかし、”何か”を理解したのは、起こった後のこと。それは、明確な詰みの一手。〈がしや髑髏〉という呪霊を祓う為に仕掛けられた作戦の第一段階。

そして、術式は、呪力が乗った流体に伴い拡張され、

「簪——!!」

水道パイプ、貯水タンクそれらの内で水と呪力が渾然一体となって膨れ上がれば、あまりの圧に容れ物が耐えられないのは必然——破壊という現象の先、吹き出るとへがしや髑髏の頭上より降り注ぐ……!!

十十

何か騒がしくなったように感じたから、朱音は、ふと目を開けた。

しかし、視界に映る縁側の様子に変わりにない。小さな庭を濡らす雨音はまだ、終わりそうになかった。軒先から雨粒が垂れ、朱音の目の前を通り過ぎると床で弾けた。

同じく、子守唄も止んでいなかった。調べは、彼女が望む限り続く。そう調和は乱れていない。微睡みを包むシャボン玉のような薄い膜は、まだ破れていない。終わりは近くともまだ終わりではない。

「気の所為……」

—— 本当か？

「……………」

安堵を零す朱音へ、間髪入れず、しわがれた声が問いかける。

—— 私には、聞こえる。崩れる音が聞こえる。

「……………」

——炎はすぐ近くだ。

「…………どつちにしろ、私は死んでいる。これも隙間の、刹那の、ほんの少しの安らぎよ」  
いずれ、終わる。炎はいつか来る。必ず来る。なんの感慨もなく朱音は言う。諦めや  
悲観ではない。純然たる事実を淡々と口にしていた。

——そうではない。

「何を、言いたいの？」

自問自答だ。分かつてはいても朱音は、訊ねずには居られなかった。

——このまま、あの夏油という男の思い通りになってもいいのか？

「…………それは」

夏油に、何か仕込まれているのは分かっていた。何か思惑があつて接触されたのだとも理解できる。

朱音は思う。このまま自分が消え失せ、自身の孕んでいた呪霊が呪いをばら撒き、夏油の計画に従う——なるほど、確かに癩な話だ。

「癩だけど…………」

何度も言う。朱音は残留思念か何かでしかない。こうして、未だ現世にしがみついているのは、奇跡だ。

生きていた時ならまだしも、こうなつてはもう諦めるしかない。

——出来ることはある筈だ。

「出来ること……」

それでもと声は言う。オウム返しに呟き、朱音は起き上がった。膝枕は、思考を巡らせるのにはあまり適さないと判断したのだ。上体を持ち上げて、縁側に腰を掛ける。

——背、伸びたな。

「……まあ、ね」

見上げた影が漏らす言葉に答えてから、朱音は思わず苦笑してしまう。彼女自身と言つて欲しかったことをこの影は出力する。あまりにも正直に、自分の欲求が出力されているから出た笑みだった。

「……雨、激しくなってきた」

しんしんと降っていた雨は、いつの間にやら強くなり、土砂降りの様相を見せていた。そこで朱音は、気づく。

「炎が……」

雨に濡れながらも燃え盛っていた炎が微かに弱まったのを感じた。依然と火勢が強いのは変わらない。

けれど、聞き続けていた朱音には、分かった。何か外で変化があったのだ。あの炎は、



呪霊の勢いを示しているに違いない。ならば、相応の何かが起こった。

「今なら、何か」

出来るかもしれない——僅かな希望が朱音に灯る。

「行くか？」

「……うん。年下の男の子に、後始末を押し付けるなんて、よく考えたらすつごい情けないしね」

朱音が縁側から腰を上げ、庭に立つと子守唄が止んだ。それから、誰も居ない縁側に彼女は振り返り、

「行つてきます」

そう、笑いかけた。

十十

水が降り注ぐ、一瞬手前のこと。虎杖がへがしや鬪體の掌に潰される時。

走った呪力は、野薔薇のものだけではなかった。伏黒の体で膨れ上がり、溢れ出る力の奔流。これもまた全身全霊。

それは、術式の拡張。それは、一つの極限。それは、魂の発露。呪いを手繰る者たち

は、それらを合わせ、

「領域展開」

と、呼ぶ

「——かんじょうあんえいてい嵌合暗翳庭……!!」

影が広がっていく。それはまるで海。影が形作る漆黒の大海。この空き地の隅々に手を、足を、全てを伸ばして影は支配領域を拡大する。無論、へがしや鬮體も虎杖の居るそこも含まれる。

へがしや鬮體の両掌が虎杖を踏み潰す、0.005秒前に影は、虎杖へと到達しており、足裏から影に虎杖は沈み、呑み込まれた。その後すぐに、へがしや鬮體の掌が誰も居ないそこを叩き潰した。

そして、呪力を纏う人工雨が降り注ぐ。

雨は、へがしや鬮體の炎をかなり抑え込んでいた。また完全に消えたわけではない。だが目に見えて、火力が下がっていく。

故に、好機。

伏黒の領域展開は、自身の術式を展開し、影の中を移動、分身体の作成、式神の無制限召喚を行う。

影とは光の合間に生まれるもの。強過ぎる光は、影の存在を許さない。そういう意味

でも〈がしや髑髏〉との相性はあまり良くなかった。だが、今、力は削ぎ落とされていく。炎に先までの火勢は見えない。

影の海面より、〈がしや髑髏〉へ〈蝦蟇〉の舌が無数に伸び、絡まった。頑強な拘束が〈がしや髑髏〉の動きを確実に制限する。

『マンマアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

いやいやと赤子のように暴れようと〈がしや髑髏〉は、腕を振り回し、藻掻く。

けれど、伏黒は、この領域展開に賭けていた。離すものか。逃がすものかと歯を食いしばり、拘束の維持に注力する。領域展開における呪力消費は、膨大だ。彼は、ここまですでかなりの呪力を消費している以上、この領域展開は、腹の底の底の隅々から呪力を掻き集めて成り立っていた。この一瞬のため、伏黒恵は、振り絞る。

「やれ、虎杖ッ!」

額に汗を浮かべ、思わず叫ぶ。応えはない。代わりに、虎杖が姿を現した。〈がしや髑髏〉の背後。海面から垂直に飛び出た〈鵜〉を破って現れ、続いて飛び出す〈鵜〉を足場に目標へと一直線に駆け抜ける。

領域展開下における展開者の術式は、必中だ。ルールとして存在する以上、覆らない。そして、幾つかの修羅場を共にした二人だからこそ、ここまで精密なコンビネーションがとれた。

「——ッ!!」

つるりと曲線を描く後頭部が虎杖の視界一面に映り込む。振りかぶった拳の行く先は、もう決めている。なら、もうやることは唯一つ。渾身の一撃を叩き込むだけだ。ぐつと握られた拳は、引き寄せられるようにへがしや髑髏へ迫った。

やった——!?! 誰もがそう思ったその時。

『パツパア……』

——ぎゅるんと首を回し振り返った髑髏は、虎杖を見、啜う。

「虎杖ッ!」——叫んだのは、野薔薇。

声も出ず、目を見開いたのは、伏黒。予測できなかつた。虎杖は理解していてもへがしや髑髏の動きを完璧に把握する事は出来なかつたのだ。

この時を待っていたとばかりにへがしや髑髏が浮かべた笑みは、悪辣だった。

そして、逃げ場の無い虎杖の眼前、三日月形に開かれた大口の中、とろけた様な炎は、青く収束して。

十十

『駄目だよ。君は、もう人を殺したら駄目だ』

十  
十  
十

虎杖の視界を満たしていた光が消え失せる。伏黒や野薔薇には、何が起こったか見え  
ていた。〈がしや髑髏〉の口が閉じられたのだ。出口を失った炎は、〈がしや髑髏〉の体  
の中に逆流していた。

光に焼かれ眩んだ虎杖の目は、元の世界を取り戻していない。だが、見えている。虎  
杖悠仁には、この拳が届く先が見えている。

集中の果て。コンマとコンマ、瞬間の彼方。0.000001秒、秒針の一刻みを何  
度と刻んだ結果を世界は、黒い火花として表現する。

——黒閃。

刹那、黒の一撃は、〈がしや髑髏〉を完全無欠に粉碎した。

十  
十  
十

かつんとティーカップの底をソーサーで鳴らし、

「…………おっと、祓われたか。残念」

肩を竦め、夏油は、何も期待してなかったかのように独りごちた。

「そうそう、私、君のこと嫌いだったんだよね。お蔭でせいせいしたよ」  
クツクツクと夏油は、一人、小さく笑った。

十十

「……………朱音さん」

未だ止まぬ雨の中。色を取り戻した視界でへがしや鬪體は崩れ落ちていた。炎は灯らず。既に息絶えている。立ち竦んだ虎杖は、拳をじつと見つめていた。

十十

『空木田朱音は、末期癌を宣告されていたようです。それが半年前、そこからの消息は、現在に至るまで断片的にしか確認できませんでした。都内に住居を移し、SNS上での呪術師及び、呪詛師として活動していたようです』

詰まり無く語られるのは、朱音に関しての伊地知の定期報告だった。これも後は書面に纏めるだけの事。わざわざ口頭で伝えているのは、五条が望んだからに他ならない。

『虎杖くんへ開示された術式を使用可能となった契機も半年前の宣告でしょう。死への接近、自覚が現在の調査から最も有力な起動要因トリガに該当すると思われれます』

「分かった。伊地知、ありがと。……虎杖の様子はどうか?」

『表面上は、普段と変わりません。まあいつも通りです』

「成長かな?」

浮かぶ苦笑。どうやら伊地知も五条と似たような表情らしい。次に作った言葉の端々に苦味が見えた。

『どうでしょう。彼ら、自分のことを隠すのが思った以上に上手……いや、最近の若者は、隠し事が上手ですね。私の頃は、すぐにボロが出ていました』

「僕がやるべきだったんだけどね。ほんと」

『仕方ありません。タイムリングが悪かったんです。アイヌ呪術連との対談は今後の情勢に大きく関わります。これもまた、外せない案件でした』

「……そうだね。それじゃ」

通話を切った五条は、一人、歩みを再開した。

「半年、か……」半年前、6月。浮かぶのは、「宿儻……関係があるのか?」

呪いは連鎖する。以前、伏黒が対敵した橋の下の呪霊も、受肉した宿儻に呼応したかのように起動していた。

「だけど、宿儺の指じゃなかった」

戦闘の行われた空き地は、確かに何かが封印されていた。宿儺には及ばずともそれなりの呪物だったようだ。周辺のビルにも影響を及ぼし、出ると噂になっていた。実際、あてられたのか、幾人か自殺していた。しかし、自殺が起きる間隔も空いた上、それぞれ近くはあれど別のビルだった為か、単なる偶然と処理された。結果、呪霊案件として上がる事もなく終わった。

だがそういう建物として箔がついてしまう。当然、不動産屋も隠すわけにもいかず、大体の買手が気味悪がつて中々買手も現れず、所有者が居ても倉庫代わりに使われており、一部若者の間では心靈スポットとして扱われていた。

「強い呪いに誘発されるのはありえる。ましてや、彼女の術式は、呪いを取り込んで呪霊に変換するもの。実際、昔から呪いには過敏だった」

それに、術式への覚醒が半年前だ。短期間で術式を使い熟すつていうのは、普通じゃない。高専所属当時を知っている五条には、朱音が才能に満ちていた様には思えなかった。

しかし、三年。三年は短くも長い。何か変化があったのかもしれない。心境の変化。環境の変化。もしくは、

「……誰かが使い方を教えたのか」



五条は、何かピースがはまった気がした。思考の一欠片。大きな絵を埋めて、真相に辿り着くための一手。重要な一ピース。

と、そこで、「おっと」見慣れた顔を見つけた。そちらに足先を向ける。公園の敷居を跨ぎ、ベンチに腰掛けた彼の前に立つと。

「や、悠仁」

「……あ、五条せんせ」

声をかけて、やや遅れて、虎杖から反応がきた。近づいているのに気づかなかつたのは、何か考え事でもしていたのだろうか。

「こんなところで、何やってんの？」

「せんせこそ、何やってんだよ。ああ、出張だっけそういえば」

「その帰り。秋の北海道はいいよ。最高だった。じゃがバター旨かった。ホツカホカでホツクホクだ」

「マジで？ 俺も連れてってよ。カニとかいくら食べたい」

「んー。まあ、また今度ね。それで、何やってたのさ。ここ寒くない？」

「うん、ちよつと寒い」

それだけ言い、少しの間、虎杖は口を閉じていた。

「……」でさ、朱音さんに会ったんだ」

「そっか」隣に五条は腰掛け、「悠仁、朱音を祓ってくれてありがとう。僕がやるべきだったんだ」

「止めるべきだった。あの喫茶で止めておくべきだったって、俺思うんだ」

「悠仁——」

「分かってるんだ。もう終わったことだったってさ」

五条が何事か言わんと口を開けたところ、虎杖は遮るように口を開いた。

「分かっていても、後悔しちゃうんだよな。なあ、先生」

「なんだい、虎杖」

「呪術師って、ずっとこういう後悔を繰り返すのかな」

「……そうだね」

沈黙の後、五条は、ゆっくりと口を開いた。

「でも生きてたって同じだ。呪術師は、それがちよつと多い。人より見えるものが多いから、どうしても後悔も増えてしまう」

「……うん」

「呪術師って、職業はさ。いつつも何か起こってからだろ？ 警察もそうだけどさ。呪いって予防のしようがないから、どうしても後手後手になっちゃう。どうしても誰かが傷つかないと動き出せない」

「せんせも?」

「そうさ。いくら特級だなんだと持ち上げられても。僕らはいつも始まらないと動けない。そうやって後悔は積み重なる」

「そうだよな。そうだよな……」

「でもさ、それでも救えるものがある。呪術師は、他の人に救えないものが救える。虎杖は、救いたいんでしょ?」

「……なんかそう言われるとちよつと気恥ずかしいけどさ」

微笑を浮かべた虎杖は、それから確かに頷いて。

「うん、俺は、救いたい。だから、折れないよ」

「それでよし」五条もまた笑顔を浮かべ「それじゃ、僕は帰るけど。虎杖はどうする?」

「もうちよつと、ここに居る。門限までには必ず戻るよ」

「うん、分かったよ」

そう言い残して、五条は去っていった。落ち葉を踏む音が遠のき、背中が見えなくなった時。虎杖は、脇に置いておいたビニール袋に手を伸ばし、何かを取り出した。

「相変わらず、よく分かんない名前だな」

手の中にあつたのは、細長い白地のパッケージ。そこに黒字で、『ウマすぎ棒!』スクラロース味』と印刷されている。無言で開け、出てきた棒状のスナック菓子を虎杖は

一口、頬張り。

「……………しよっぱい」  
と、呟いた。